

<論 説>

アダム・スミスにおける本能の概念化と経済学の生物学的基礎

高 哲 男

本稿の課題は、アダム・スミスの思想体系の内在的理解と思想史上におけるその独自の意義の解明を目指す場合、ニュートン力学の方法だけでなく、むしろリンネに代表される生物学的な方法に注目することが不可欠になるというアイデアを、「本能」概念への着目をつうじて立証することである¹⁾。もちろんこの試みは、アダム・スミス研究における近年の潮流、つまり「モーラル・サイエンスとしてのスミス体系の再構成」をめざして『道徳感情の理論』と『諸国民の富』とを統一的に再構成しようという一連の試みを射程に入れつつ²⁾、「進化論的な分析枠組み」の中でスミスによる「人間性進化」の理論を再構成しようとするJ. エヴェンスキー (Evensky 2005, 9-16)、およびスミスの思想をS. ヘイルズ、W. カレン、J. ブラック、J. ハットン、C. リンネ、G. ビュフォンといった18世紀に最盛期を迎える化学や自然史研究と深いところで共鳴するものと捉えるM. シェイバスによる新しい問題提起 (Schabas 2003; 2005) と、重なるところが少なくない。

だが、エヴェンスキーの場合、「進化論」の理解に疑問がある。「ダーウィンのな生物学的自然選択は拡散を問題にしている」のに対して、「スミスの社会的な自然選択は収斂を問題にしている」(Evensky 2005, 12) という主張は正しいのだろうか。「スミスにおける人類の進化」は「人間と社会の共進化であって」、意図するか否かにかかわらず、「一定の社会構築に向かう個人の成長を促す」という主張がそもそも曖昧であるとも言えるが、なによりも、「自然選択」をおこなう単位が個人なのか集団なのかを明確に区別していない。このように個体と個体群とを区別できない「自然選択」の理解であるかぎり³⁾、その進化論は、H. スペンサー流の功利主義的な進歩主義や共産主義革命による人間性の完成を説いたK. マルクスの唯物史観とよく似た「人間性の完成」を目指す「進歩主義的進化論」になってしまう可能性が強く (Taka 2005, 40-41)、現代進化生物学の見地から見て、「進化論」とは名ばかりのものになってしまうだろう。

他方、「生物学的」ないし「自然史的」アプローチを強調するM. シェイバスの新しい試みには、説得力に富む新知見が少なからず含まれている。労働が生産物の中に固定化し体化するというスミスの労働価値説が、カレンやブラックの「空気と熱の流動説」にヒントを得たものであるとか (Schabas 2003, 270-71; 2005, 89-90)、経済発展を数百年という超長期で考察するという点でビュフォンやハットンと共通性を持つという指摘 (Schabas 2003, 275; 2005, 95)、さらに農業重視の

発想は「自然界」における発展の自然史的な理解にもとづくという指摘など (Schabas 2005, 94-95), 明らかに従来のスミス研究を拡充するものである。

しかし、スミスにおける人間の自然史的な解釈の存在が経済社会分析のレベルで具体的にどのような独自の分析をもたらしたのか、という点まで明確にできたわけではない。「自然価格とは、いわば、あらゆる商品価格が絶え間なく強く引きつけられる gravitating 中心価格なのである。……商品価格がこの中心で静止し持続させないようにする障害物の有無にかかわらず、商品価格は絶えずそれに向かい続けるのだ」(Smith [1776] 1976. I. vii. 15) というスミスの主張の中に端的に現れる自然価格体系の自動調節メカニズムを、従来理解されてきたニュートン的な重力法則とのアナロジーとしてではなく、リンネ流の生物学的・自然史的な自然がもつ均衡回復メカニズム (Schabas 2003, 274), つまり生物学的なフィードバックのメカニズムとして理解できるようになったとしても、結果的に自然が、つまり人間と自然がどのように新しく見えてくるのか、これが明確にされたとは言い難いからである。もし、進化論的な意味での自然の発展を主張するのであれば、体系の安定性や均衡の維持という意味での力学的なネガティブ・フィードバック・システムとしてだけでなく⁴⁾、むしろ、「始まりも終わりもない」変化・拡大と成長という進化論的メカニズム、つまりポジティブ・フィードバック・システムとして人間社会を把握することが不可避になるはずである。そうでなければ、かつて地球上で「これだけ大規模の一時的減少や、種、属、科などのほぼ完全な交代が再三起こってきたのに、いったいなぜ生物多様性は終始一貫上昇傾向を示し続けているのか」(Wilson 1992, 192: 訳(上) 327) を、説明できないだろう。

そもそも「18世紀の社会は飽きることなく自然史に注目し続けた」(Farber 2000, 2) という事実があるし、とくにイギリスでは、自然神学と植民地拡張に支えられた自然史の収集と研究が時代のファッションであった。J. グレゴリー、W. ダンカン、J. ビーティー、T. リード、A. ファーガソンなどのアバディーンを中心にしたスコットランド啓蒙思想家たちは、F. ベーコンやJ. ロックだけでなく、ビュフォンの自然史研究の影響を強く受けていたし (Wood 1989; 1996), イングランドでもリンネの『植物哲学』(1751) を中心した植物学がJ. リーによって『植物学入門』(1760) としていち早く翻訳されて版を重ねており、方法論的な『論考』もB. スティリングフリートにより1759年に翻訳されていた (Allen [1976] 1994, 36-37)。ビュフォンの『自然史』、リンネの『自然の体系』、スティリングフリートによるリンネ著『論考』の英語訳やリーのそれなど、多くのものが「アダム・スミス文庫」に所蔵されていたという事実もある (Mizuta 2000)。だが、この事実だけを根拠に、スミスもまた時代の子として生物学や自然史研究から深く影響を受けていたと結論することは許されまい。我々には、スコットランド啓蒙を代表する哲学者D. ヒュームが「経験と観察」にもとづいて「人間の科学」の建設をめざしたばかりか、彼が「ニュートンの現実的な考え方と方法論」に深く影響されていたという事実も (Rosenberg 1993, 64-65; 69), 既に明らかにされてきているからである。現代に至るまで、スミスはニュートン的な方法に基づいていた、という理解の方が主流であったように思われる⁵⁾。

それゆえ本稿の課題遂行にあたっては、スミスの科学方法論と認識論の精確な理解が不可欠になる。議論の拡散を防ぐため、まずニュートン的な物理学的方法と生物学的方法に焦点をあて、スミスの思想確立・展開過程における生物学的方法が担った役割を、彼自身の議論に絞って文献的証拠に依拠しつつ確認することから始めよう。

I

スミスにおけるニュートン的な科学方法論の根拠として一般的に言及されてきたのは、没後出版の『初期哲学論文集』(Smith [1795] 1980) に収録された「天文学史」(以下、HA と略記し、Smith [1795] 1980 の節とパラグラフ番号を併記する) である。スミスがまだ若いころに書いたこの論文の主題は、「未完成」ととどまっているニュートンを含む「天文学の歴史」の叙述・分析を行なった第4節が分量的に大半を占めるという事実にもかかわらず、その長いタイトル「哲学的研究を導き指導してきた原理：天文学史における例証」から分かるように、あくまでも「哲学的研究を導き指導してきた原理」つまり哲学的研究の推進力 principles の解明である。この点に注目すれば、例証である天文学史の解釈に先立って展開された植物学・生物学における個別対象の分類や相互の関連付けをめぐる認識論や方法論は、このような意味において、スミス独自の科学方法論であると見て良いことになる⁶⁾。

スミスによれば、「哲学は、自然を結び付けている原理に関する科学である」(HA. II. 12) が、「結合」には、大別して2種類のものがあった。

第一に、経験と観察によって多種多様な植物を「属」と「種」に細分化して分類し、分類することができれば、対象の本性と相互の関連性や秩序を完全に理解したと植物学者が思い込むという (HA. II. 2-3)、対象の類似性の比較という意味での「生物学的自然」の理解である。

第二に、事象の間に時間的連続性が観察される場合に慣習的に定式化される「事象相互間の密接な結合」と、慣習ゆえに想像力が連続的で自然な運動と思いきってしまう諸事象間に存在するような「中間事象」と「中間事象のプロセス」、つまり「物理学的自然」の理解である。換言すれば、「たとえ類似性はなくても、二つの対象物が互いに前後するということが頻繁に観察され、われわれの感覚にもそのような順序であることがつねに示されたときには、二つのものは空想の中で一緒に結びつけられ、一方に関する観念が、自発的に、他のものに関する観念を呼び覚まし、導き出したように見えるのである」(HA. II. 7) という場合の「観念連合」による原因と結果の結合の仕方であり、こうして、外的対象物の運動の結果が科学的に「予知」されることになる。

後者が「経験と観察」にもとづくニュートン力学的な「自然」理解の方法、あるいはヒューム的な「慣習論的認識論そのもの」(Lindgren 1969, 901) にもとづく理解の仕方であることは、詳しく説明する必要はないだろう。本稿での関心は、前者つまり「生物学的自然」を理解する方法について、スミスがどのように説明・整理していたかにある。

異なる対象の間に発見しうる類似性の観察が、心 mind を楽しませることは明らかである。そのような観察という手段を使って、心は、心に浮かぶアイデアのすべてを整理したり秩序立てたりして、それを妥当と思われる種類や分類に仕分けようと試みるのである。他の点では著しく異なった広範な多様性をもつ対象のあいだに共通する唯一の属性しか観察できない場合、その唯一の事情が諸対象を結合し、それらをひとつの共通の種類に帰し、それをひとつの一般的な名称と呼ぶのは十分理にかなっている。こうして、自ら動く能力を持っているあらゆる事物つまり獣、鳥、魚、昆虫が、動物という一般的な名称のもとに分類されるのも、さらにこのようなものが、そのような力を欠落しているものと一緒にさらにずっと一般的な固体 substance という用語にまとめられるのも、こうしてなのである。そしてこれが、学界において属とか種とか呼ばれている対象や概念への類別化の起源であり、あらゆる言語においてそれを表現するために用いられる抽象的で一般的な名称の起源なのである。(HA. II. 1)

植物学者や自然史家による類別化の努力は、彼らの「知識と経験が深まれば深まるほど、いっその細分化と再分類」(HA. II. 2)をおのずと引き起こすが、個別の対象の間に存在する類似性の発見と結合にもとづく属や種への類別化と概念化が、言語における「抽象的で一般的な名称」の形成と同じ起源とロジックを持つというスミスの指摘は、1761年に発表され、後に『道徳感情論』第3版(1767年)に付録として採録された「言語起源論」での議論に平行している。それゆえこれを、独立でばらばらな個別事象の認識から一般的抽象的な法則的認識への発展と理解すれば、スミスの「言語起源論」における単純な概念から複雑な概念への歴史的発展というロジックはニュートンの方法である(Becker 1961, 14-16)、と解釈できないわけではない。だが、観察的類似性にもとづく類別化は、けっして「具体的なものから一般的で抽象的なものへ」、つまり「単純から複雑へ」という方法に尽きるものではない⁷⁾。

そもそも分類は、大別して二つの側面を持つことに留意する必要がある。ひとつは、スミスが上で指摘したように、「異なる対象」の間の類似性を観察し、多様性の中から共通の特徴を見出して「属」にわけ、一般的名称をつける(新体系の構築・編成替え)ということ、もうひとつは、新しい個別対象がもつ特徴をすでに特定済みの「属」に振り分けて「分類」する(体系の内的拡充)という側面である。もちろん両者とも「共通の特徴」を見分けるという点で共通しているが、後者の特徴は、「種類」を特定する「基準・尺度」としての属性があらかじめ確定していることにある⁸⁾。

言い換えるなら、観察すべき対象が増加すればするほど、類似性を探り当てて分類するための基準そのものを吟味し直し、新しい分類を模索せざるをえなくなるというのが、生物学的方法がもつ不可避の宿命なのだ。生物学では、観察と比較の対象である生物そのものが、当然スミスはまだ知らなかったとはいえ、進化の過程でつねに他の種に対して変化し続けるためであり(Wilson 1992, 46: 訳(上) 78-79)、対象が電子やイオンのように一定普遍なものである物理化学とは大

きく異なるからである。もとよりアナロジーを中心とする生物学的方法も、新しい観察と実験の結果が古くからの理論体系＝システムにおける不統一をうみだし、新しい観察と実験の進捗とともに新しい理論体系＝システムが構築されると言う意味で天文学の方法や発展の仕方と共通するが、ニュートンの方法という場合には、重力法則の応用という意味でのニュートン力学の演繹的な体系が強く意識されていると言ってよい⁹⁾。つまり一般的に「ニュートンの方法」という場合、理論体系構築のための基点となる「単純」、つまり公理そのものを次々に「取り替える必然性」が強く意識されることはない。ニュートン的な科学の方法とはもともと「実験と観察」であったのだが、E. マイアが鋭く指摘したように、実験が力学の唯一の好みの研究方法になると、観察にもとづく記述科学としての生物学の「科学性」は貶められた。こうしてとくに19世紀から20世紀にかけて、起源にかかわる問題が創造主義者を、デザインをめぐる問題が自然神学者をそれぞれひきつけたために生物学研究が停滞し、「神、人間の魂、物質、および運動のみを含む宇宙を受け入れる点で障害を持たなかった物理科学」の方法が全盛期を迎えることになる(Mayr 1997, 28-29: 訳 35-36)。

スミスが観察による「分類」の二つの要素のいずれをより重視していたかを直接うかがい知る手がかりは少ないが、ビュフォンの『個別と一般の自然史』に対するスミスの言及は、数少ないその一つである。「エジンバラレビュー同人宛の書簡」(Smith [1955-56] 1980. 以下本稿ではこの論文はLERと略記し、パラグラフ番号を併記する)のなかで、スミスはフランスで目覚ましい発展を遂げていた新しい科学・文芸について、百科全書の刊行と自然史研究の隆盛を指摘しつつ、次のように言及していた。

刊行されたのは、まだ仕事のごく一部でしかない。植物の形成、動物の発生、胎児の形成、感覚の発達その他に関する推論的・哲学的な部分はビュフォン氏によるものである。実際この紳士による体系は、ほぼ漏れなく仮説的なものだと考えてよい。そのような発生の原因に関するかぎり、その体系についてある程度明確な見解を確立することなどまず不可能である。しかし、文体が素晴らしく流麗で、豊富な語彙と自然な雄弁でもって説明されていること、さらに彼の体系は自ら行なった多くの独特で興味深い観察と実験に結び付けられ、支えられていることが認められなければならない。尊大さなどまったく感じさせず、なんら批判の余地も残さぬものと思われるドバントン氏の手になる叙述全体の簡明さ、明確さや妥当性が、この著作のもっとも重要な部分である。(LER. 8)

18世紀中葉の貴族・文化人の間で大いに盛り上がっていた珍しい動植物の収集と展示ブームの牽引者であり成功者でもあった時代の寵児ビュフォンの『個別と一般の自然史』がもつ特徴は、何よりも豊富な個別種の絵見本と形態的・構成上の特徴、さらに人間にとっての有用性に関する情報提供にあった。スミスが「読者宛の手紙」を執筆した時点で刊行済であったのは、「地球の

理論」「発生のシステム」「人間に関する個別的な研究」を中心とするいわば総論的な1~3巻(第3巻に含まれる人体の解剖図をふくむ多数の観察部分の執筆はドバントンの担当)と「動物の本性について」や馬や牛という「家畜」を含む第4巻(1753年)およびヤギや豚を含む第5巻(1755年)までであるが¹⁰⁾、スミスの蔵書から判断する限り、エジンバラレビューの中で彼が言及した内容は最初の3巻であったと思われる¹¹⁾。「植物の形成、動物の発生、胎児の形成、感覚の発達」に関する推論的・哲学的な分析とは、第2巻に含まれている論文「動物の一般史」第1節「動物と植物の類似性」、同第4節「動物の発生について」、同第10節「胎児の形成」、および第2巻と第3巻にまたがって収録されている論文「人間の一般史」の第8節「感覚一般について」を中心に展開された論考であることは明らかである¹²⁾。

しかも内容に即するかぎり、スミスの指摘は要点をついたものと言ってよい。すなわち、動物の成長も、植物のそれと同様に、「内的鑄型」に注入される栄養によって成長すると説明していること (Buffon [1749] 1750, Tome 2; 16-18: 訳 323-24 頁), 最新の顕微鏡で動物の精子や卵子を観察し、受精にかかわるさまざまな実験にもとづいて「精液動物」の働きに関してあれこれ想像をたくましくしていること (Buffon [1749] 1750, Tome 2, 62-85: 訳 327-332 頁), オスとメスの体軀の各部位から抽出される二種の精液つまり「有機的な粒子」が混ざり合い、二種の精液のうちの違いが性別を、共通部分が体軀を作り上げて胎児が形成され、それが栄養を吸収して大きくなると説明していること (Buffon [1749] 1750, Tome 2; 22-23), そもそも二重に見える像は触覚をつうじた経験の結果一つに重なって見えるようになること、さらに外部感覚というものは体のさまざまな部位に広がっている神経からなり、神経とは感覚をつかさどる全身的な器官に他ならないから、感覚とは一つの共通の起源をもち、したがって神経の密度や距離に応じてことなる感覚対象からの微細な粒子の違いによって、感覚相互間の違いが生じると理屈付けていること (Buffon [1749] 1750, Tome 3; 139-141) など、まさに彼自身が行なった実験の結果が、仮説と一般化をまじえた「推論的・哲学的分析」として叙述されているからである¹³⁾。

スミスはまったく言及していないが、『個別と一般の自然史』第一巻冒頭に置かれた自然史研究の方法を要約した「第1論説」¹⁴⁾でビュフォンは、数学と自然学(観察と実験の結果)との連合という意味でのニュートンの方法が手本になるとしたうえで (Buffon [1749] 1750, Tome 1; 20-22: 訳 312-13 頁), 当時の生物学の主流であった分類学を「まったく恣意的」なものとし、頁を割いてリンネによる分類の恣意性と不統一を糾弾したりしているという事実もある。この点は、P. R. スローンが指摘しているように、リンネが想定していた類の「認識可能な自然の秩序の存在」と「この秩序をいわゆる自然の体系のなかに論理的に体系化できる可能性」に関する「哲学的な前提」に対する根底的な批判の反映であり (Sloan 1976, 358), ビュフォン自身のいう「自然の秩序」とは、普通の人が、自然の産物を「有用性の応じて研究し、それらが示す親しみの度合いに応じて考察し、この知識の秩序にしたがって頭の中で整理する」(以上 Buffon [1749] 1750, Tome 1; 11-14: 訳 303-306) 結果得られる、という意味での実用的な「自然」なのであった¹⁵⁾。

とすれば、フランスの自然史研究に関する紹介の中で見るかぎり、『個別と一般の自然史』第3巻で人体の各部分について精密な解剖図を提供し、5巻以降では四足動物の身体的特徴の客観的な叙述を担当したドバントンの仕事や、レオミュールによる刊行中の大著『昆虫の歴史』のところが、スミスによってずっと高い評価を与えられているように見えてくるのは、当然のことと云ってよい¹⁶⁾。

レオミュールの著作は「比類なく完璧にちかく、高度な観察技法を駆使したこのような小さな動物の体の営みと管理 *oeconomy and management* に関する注意深い観察」であるばかりか、「無垢な好奇心と純真な喜びをもってなされた観察と実験」であると絶賛されている。つまりそれは、「観察＝科学情報という共有財産 *the public stock of observations*」の増加に直接寄与するだけでなく、「すでになされた観察をよりいっそう補完し、より適切な体系に整序する」際の基礎になるからである（以上、LER, 248-49）。このような評価は、科学の発展とは観察＝科学情報が社会的に共有財産として蓄積されていくプロセスなのだ、というスミスの考え方の当然の帰結であると理解できよう。

他方、ビュフォンからその分類学を「恣意的」と批判されたとはいえ¹⁷⁾、現代にまでおよぶ動植物命名法と分類の基礎を打ちたてた18世紀を代表するC.リンネへの言及は、正確な執筆年代が不詳の没後出版論文「外部感覚について」における五感、つまり触覚、味覚、臭覚、聴覚、に続く最後の節「視覚について」の後半（Smith [1795] 1977所収。以下本稿では、この論文をESと略記し、パラグラフ番号を併記する）でなされている。書評であったビュフォンやレオミュールへの言及と違い、リンネによる「種」「属」「目」等の動植物分類の成果が直接利用されている点に特徴がある。これは「スミス自身の観察に加え、リンネの『自然の体系』のデータを取り込みながら」（Wood 1989, 100）人間と幼児や大部分の動物の子の行動を観察し、「すべての経験に先立つ」本能的知覚、本能的先入観や本能的唆喚といったものが存在すると判断せざるを得ないという後半独自の議論の中においてのことであるが、この論文の執筆時期についてはまだ学界の一致した見解が定まっていないのが現状であるから、この点について、あらかじめ若干の考察を加えておかなばならない。

II

論文「外部感覚について」は「有能な若い哲学者なればこそ期待できる作品」（Raphael and Skinner 1980, 15）であって、その執筆は、ヒューム『人性論』（1739）の十分な理解やヒュームとの直接的で親密な交際の開始に先立つ時期、つまり「1753年以前である」（Wightman 1980, 133）といわれてきたが、これには二つの文献的証拠にもとづく疑問がすでに提出されている。

第一に、スミスがその論文の中で利用した鳥類の分類名を根拠にすれば、その執筆時期は、リンネの『自然の体系』¹⁸⁾第10版の刊行年である1758年以前ではありえない（Brown 1992）。というのは、1) スミスが「外部感覚について」のなかで言及した「リンネによる鳥類の分類におけ

る Grallae (シギ類) という「目」の名称 (ES. 70), 2) リンネが始めた「哺乳類」という「綱」の分類名 (Ibid., 77), および 3) リンネのランク付けで「ぜん虫類 Worms に分類された綱に属するかなりの動物は、頭を持たないことさえ多い」(ES. 83) などという主張の根拠になる記述は第9版まではまったく存在せず、第10版で始めて登場するからである¹⁹⁾。スミスの蔵書に含まれるのが第12版で、その第1巻は1766年の刊行であるから²⁰⁾、スミスが自らの蔵書に依拠して執筆したという前提を加えれば、当該部分の執筆は早くみても1767年以降のことにならざるをえないのである。

第二に、すでに篠原久が明確に指摘したように、「外部感覚について」のなかでなされたB. フランクリンが『実験と観察』のなかで指摘したという内容は、フランクリンの1751年の版には含まれておらず、スミスも所有していた1769年の版以降の版に限定されるため、少なくともその部分の執筆は1769年以降という事実がある(篠原1986, 100頁)。

残念なことに、ブラウンの指摘は1)と2)の事実の指摘にとどまっていた(Brown 1992, 334)。くわえて、スミスが1759年10月に書簡の中で書き記した「部屋の窓から見える風景」の叙述が、「外部感覚について」に於ける記述と極めてよく似ていると言う点を根拠に、その執筆年代を1758年から1759年10月の間と断定し(Brown 1992, 335)、しかもそれを『道徳感情の理論』第2版における改訂と強引に結び付けようとしたこともあって、あまり重視されて来なかったようだ²¹⁾。つまり、「その論文の完成は、1758年以後のことで、蔵書が13版であることから判断すると、さらに遅れるだろう」²²⁾(Ross 1995, 228)とか、「このような言及は後に付け加えることが可能である」(Ross 1995, 104)だけでなく、「10年間にわたって書き、修正されてきた」(Schabas 2003, 266-67 fn.)と解釈されてきたからである。この論法に従えば、篠原の指摘もまったく同じように解釈されかねないだろう。

だが、上記3)で指摘した「ゼンチュウに関する考察」は、視覚、聴覚、触覚という異なる外部感覚器官相互の関連性にかかわる考察、つまり「外部感覚について」の本論ともいえる後半部——パークレー『新視覚論』への言及の後の部分——全体のテーマに深くかかわる分析として展開されている、というK. ブラウンが見逃した事実を軽視することは許されないだろう。加えて、「1753年以前の執筆である」とされてきた論文「外部感覚について」の完成——現存のものが完成であったという前提の下である——が、なぜ他の初期論文と違ってそれほど長期にわたって修正し続けられたのか、少なくともこの理由を説明する必要がある。

もともと論文「外部感覚について」における主張の要点は三つあった。第一に、外部感覚器官における知覚とは、たとえば外部対象が甘いから甘いと知覚するなどという類の外部対象が固有にもつ本質の接受などではなく、感覚器官独自の機能にもとづくこと。第二に、「触覚を持たずに生まれてきた動物は存在せず、それは動物の生命と存在という本質にとって不可欠であると同時に、不可分のものである」(ES. 49)ことを、他の4つの感覚と比較関連付けながら論証すること。第三に、人間も含めた動物の知覚の大部分は習慣にもとづく観念連合によって説明できると

はいえ、どうしても生得的な「本能」の存在を前提しないと説明ができない点が残るという意味での「経験論」批判、これである²³⁾。つまり、さまざまな動物の本能について具体的な考察をすすめる後半部分では、さまざまな動物を体系的に分類したリンネの『自然の体系』を参照することが、スミス自身の議論を進める上で大いに役立ったはずなのである。ここに注目すると、「ヒュームに関する理解が不十分である」ということの意味は、「不十分なヒューム理解を訂正しなかった」証拠になりうるどころか、むしろ成熟したスミスによるヒューム批判の結果であるという逆の解釈が成り立つ可能性さえ生じてくる²⁴⁾。

したがって、論文「外部感覚について」後半部におけるスミスの主張の精確な理解が必要である。まずチェスルデンの白内障圧下法手術（1728年）によって生まれつきなかった両眼視力を回復した青年の術後の体験報告と、それに対するスミスの解釈を手短かにまとめることから始めよう。

この青年は、光やかすかな色を看取する能力はあったから、昼夜の区別がつかぬという意味での全盲ではなかったが、事物の形状はまったく識別できなかった。視力回復後、触覚で知悉していた対象物の知識と視覚で捕らえたものはまったく一致せず、感覚をつうじて以前知っていたものが何であるのか、「一日のうちに千おぼえ、千わすれ」ながら、一つ一つ覚えて行かねばならなかった。二ヵ月後、遠近法を用いた絵画を見、それに触って「凹凸」つまり遠近がまったくないことに驚き、「騙しているのは触覚なのか、それとも視覚なのか」を尋ね、さらに一年後、エプソム丘陵に行き、「広大な眺望を前に、それを新しい種類の視覚と呼んだ」という²⁵⁾（以上、ES. 57, 63-68）。スミスはこれを次のように解釈する。

明らかなことは、今や彼は視覚という言葉を完全に理解するようになったということだ。この雄大な眺望が彼に与えた明白な対象物は、手で触れるようなもの、あるいは彼の目に接するほど近くにあるもののように見えたりすることはない。それは、術後しばらくの間彼が閉じ込められていた小部屋の中で見慣れてきたような小さな対象物と同じ大きさに見えたりしない。新しく見えるようになったこのような対象物は、距離と大きさの両方で、そのように表現された壮大な有形の対象物であると即座に推定される。したがって彼は、いまや視覚という言葉完璧に操れる人になったのであり、一年のうちに——成人に達したあらゆる人が何らかの外国語を完全に習得するために要するよりはずっと短期間で——そうなったように思われる。最初のわずか二ヶ月の間に、彼は実に目覚ましい進歩を遂げたように見えるのだ。（ES. 68）

言語を、「発音することを通じて、互いの欲求をそれぞれが理解できるようにしようと試みるもの」（FFL, 1）と捉えていたスミスであるから、「視覚」をも一種の言語となぞらえた上で、「この自然の言語においては、類似性はさらに完璧なものだと言ってよく、語源、語形変化、活用は、もしそう言ってよければ、いかなる人間の言語よりもはるかに規則的である。文法は殆どなく、

しかもその文法にはまったく例外というものがない」(ES. 68) という興味深い主張がなされるのも当然のことである。だが本稿で注目したいのは、これが、実は単純な経験論・経験主義に対する批判と懐疑を表明するために指摘されたという点である。要するに、「この青年が目に見える対象物と可触的な対象物を結びつけるという知識を獲得したのは、まさに遅々とした速度の観察と経験によってではあるが、だからといって我々は、幼児が同種のある本能的知覚を持たないなどと確信をもって推断することはできない」(ES. 69) というスミスの主張から分かるように、可視的な世界と可触的な世界とを結合するためには、長期間にわたる「経験」だけで十分ではなく、直接の経験と無関係の生得的な「本能的知覚 *instinctive perception*」能力が存在すると思えざるを得ない、とスミスが主張しようとしていることにある²⁶⁾。経験論的認識論に対する批判、すなわち「少なくとも大部分の動物の子供が、あらゆる経験に先立つこの類の一定の本能的知覚 *instinctive perception* を持っている、ということは十分明らかである」(ES. 70) ことを論証していくプロセスで、リンネへの言及がなされ、推論を一般化していく中でリンネによる分類の成果が生かされているのである。

ヒワやツグミは親鳥が子供の嘴までえさを運ぶが、鶏の場合は生まれた直後のヒヨコさえ自分で餌を啄ばむ。つまり、卵を割ってそとに出てきた直後から、可触的な対象物と可視的な対象物とを結び付けて知覚する能力を備えており、このことは、「私が観察できた限りで言えば、地面に営巣する鳥の大部分、つまりリンネの分類では鶏やガチョウの目 *order* [ガン・カモ類のこと] に属するものの雛の大部分に、さらには、リンネがシギ類 *Grallae* という名前で分けけた目に属する長い足と浅瀬を歩き回る鳥の多くのものについて当てはまる」(ES. 70)。他方、リンネがワシタカ類、カササギ類やスズメ類などの目に類別した木の上や高い崖の上に営巣する鳥の雛の大部分は、盲目で生まれて数日後に視力をえるようだが、少なくとも飛翔能力を身につけるまで、両親鳥の共同労働により給餌される。だが、飛べるようになった時には、既に完全な可触的知覚と視覚的知覚を結合できるようになっている。「これほどの短期間にこのような能力を経験によって獲得したとは到底考えられず、それゆえ、雛は何らかの本能的示唆からこの能力を得ているに違いない」(ES. 71)。

リンネによる鳥類の分類と解説に自らの観察を付け加えてスミスが力説していることは、視覚と触覚という結合的で連合的な「知覚」の能力は、決して経験の結果からだけでは説明できず、同じ鳥でもどの「目」に属するかで異なって現れるような生得的な本能的知覚というものをそれぞれが持って生まれる、ということである。もちろんこれは、たんに鳥類だけに限られる特徴ではない。

地面で営巣する鳥と同様に、馬や牛などの四足動物の子は、誕生直後か一日後には自由に歩きまわられるほどの触覚的知覚と視覚的知覚の能力がある。他の四足動物の子は、たとえば犬や猫のように、目が見えぬままに生まれ、見えるようになれば即座に完全な視力を享受するのであって、これは肉食獣についても同様である。長期にわたり母親の胸に抱かれて育つ人間の乳児に

あつては、「周知の観念連合という原理によって可視的对象と可触的对象との結合」に必要な時間が確保されているため、「本能が提供するはずの知識を、そのために本能 instinct が役立ちうるようになるずっと前に、必ず獲得しなければならない動物にとって、このような本能はまったく役に立っていない」(ES. 74)と思われるかもしれない。だが、そうではなく、たとえ程度は弱くとも、人間の子もこの種の本能的知覚を持っていると考えざるを得ない、とスミスは言う。ここで注目に値することは、鋭い観察と実験——現代心理学の見地から見ても十分に実験と言いうる——をつうじて、この推論を導き出している点である²⁷⁾。

乳児は、生後一月経つかどうかくらいで、差し出された玩具のたぐいに手を伸ばして触ろうとする。乳児は、乳母やその周りにいることが多い人と見知らぬ人とを区別する。乳児は前者にしがみつき、後者をはねつける。月齢二〜三ヶ月に満たぬ乳児の前に手鏡を差し伸べてみよ。そうすると、その子は鏡の後ろに小さな腕を伸ばし、その子から見て、鏡の後ろに居ると想像するものに触ろうとするだろう。間違いなく子供は騙されているのだが、この種の欺瞞 deception が十分示していることは、幼児は通常の遠近法的な視覚というものをかなりはっきりと会得しているということであり、乳児がそれを観察と経験をつうじて十分に学習してきたなどということとはあり得ない、ということだ。(ES. 74)

このようにスミスは、パークレーが理解したような単なる光学装置としての視覚について議論しているのではなく、乳児における「遠近法的な視覚」の存在という事実を、観念連合の原理や単純な経験論ではまったく説明できない「本能」と関連付けて解釈しようとしていたのだが、その主張は、目が見えるか否かにかかわらずリンネが哺乳類に分類した動物の場合、生後すぐに臭覚と食欲に導かれて母乳を吸い始めるという観察によって、さらに強化される。しかも、哺乳類の場合、子宮内ではまるで植物のように「根」つまり「臍の緒」をつうじて栄養を吸収していたにもかかわらず、誕生直後から計ったように「食欲」をおぼえ、嗅覚を働かせ、乳を吸うことによって栄養を摂取し始める。これはすべて「ずっと前から自然の摂理という心遣いがゆっくり準備してきた」ことの結果である。用意された消化器官が満たされていないという感覚と臭覚とが結合して、空腹感つまり食べ物に対する生理的欲求 appetites を生み出す、とスミスはいうのである(以上、ES. 77-78)。

きわめて精緻な「中間的对象や事象」の生物学的観察であることは確かだが、ここで留意すべきポイントは、この新しい「満たされていないという感覚」や「食に対する本能的欲求」が、身体それぞれの器官の機能に由来して発生している、と捉えたところにある。人間はそれぞれ異なった器官の有機的統一体として成り立つが、それぞれの器官が独自の感覚作用を持つばかりか、相互に結合してさらに新しい感覚をうみだすというように、まるで「心が生まれる」メカニズムの解明をしているかのように論じるからである。すなわち、言う。

一定の身体状態に起源を持つあらゆる生理的欲求は、それ自体を満足させる手段が何であるかを、したがって、経験にはるかに先立つ場合でさえ、その充足がもたらす喜びへの期待や予想といったものを示唆しているように思われる。つねづねそう思うのだが、思春期よりもずっと前に現れるセックスに対する生理的欲求においては、これはまったく疑問の余地なく明白である。食物に対する生理的欲求が新生児において示唆するものは、その本能的欲求を充足しうる唯一の手段である乳を吸うという活動なのだ。乳児は絶えず吸い続ける。唇に触れるものは何でも吸う。口に何もあてがわれていない時でさえ吸うことからすれば、吸う事で得られる喜びの期待や予感といったものが、それだけがああ喜びを与えることができるような姿や形をしたものを、喜んでその口に運ばせているように見えるのである。まず経験的とは言えないような想像によって、自然がそれぞれの充足を準備した器官に対して同様な効果を生み出すような、ほかの生理的欲求も存在する。(ES. 79)

生理的欲求 *appetite*、充足がもたらす喜びへの期待や先入観という表現をとってはいるが、要するにこれはあらゆる経験に先立つ生来の知覚能力、つまり自然の対象的事物を認識する生得的な能力=本能をさしていることが、明らかであろう。本能とは、「乳児の唇が、その形状と行為だけがうまく適合しうるような対象物に接する以前にさえ、それを乳を吸う行為と形状にあうよう整えるように教える原理」(ES. 80) のことなのである。多くの動物綱に属するもののうちリンネがゼンチュウ類に分類したものの中には、頭部を持たぬものも多く、目も耳も持っていないばかりか、顕微鏡で見ても「明確な嗅覚器」の存在が確認できないものがあるが²⁸⁾、それでも胃と消化器はそなえて食物を求めて動き回ると指摘し (ES. 83)、次のように本能の概念を総括する。

自ら動く能力を持ち、快適であるか不快であるか、つまり一方の側が他方の側よりもより暖かいか冷たいのかを自分の体で感じる動物の新生児は、本能的に、すなわちあらゆる観察と経験に先立って、快適感のある側に向かって動き、不快感のある側から遠ざかろうと努力するように思われる。だが、動こうとする欲求そのものが外部性について一定の観念または先入観の存在を前提している。つまり、快適感のある側に動こうとしたり不快感のある側から遠ざかろうとする欲求は、このような二様の感覚作用の根拠である外部的なモノや場所について、少なくともある漠然とした観念を仮定しているのだ。(ES. 85)

上の引用から明らかなように、「人間だけでなく、いかなる動物も、感触を持たずに生まれたことなどまずありないのであって、それは動物の生命と存在という自然の本質と切り離せない、不可避的なものなのである」(ES. 49) とスミスが主張した理由は、ゼンチュウも含めておよそ動物においては、内部的なもの=自身と外部的なもの=他者との位置関係的な区別が個体の存続にとって不可欠な感覚である点で共通している、という事実の確認にあった。したがってまた、こ

ここでスミスが言っている熱さや冷たさを判断する「快適感」や「不快感」は、決して功利主義的な合理主義の根拠としてのそれと同一ではない。快適さの度合いが健康や不健康をもたらすというのは経験が教えるところであるが、そもそも「このような感覚機能が人間に与えられたのは、我々の体それ自体を保存するため」なのである。

位置を変えようとする欲望は、外部性に関する何らかの観念、あるいは実際に存在する場所から異なった場所への身体の移動という観念を必然的に前提しているし、さらにまた、同一の場所にとどまろうとする欲望は少なくとも場所を変える可能性に関する観念を前提してゐる。もしこのような知覚が外部性の存在について、ほんやりしたものであれ一定の観念を本能的に示唆していないのなら、このような知覚は自然が意図するところにまったく答えられていないということになる。(ES. 86)

同様のことは、「耳の中でしか知覚されない」聴覚についても妥当する。音も、同様に、「本能的に、したがってあらゆる観察と経験に先立って、その観念を呼び起こす何らかの外部的な実体あるいはモノに関する漠然とした観念をおぼろげに示唆する、と信じたい気持ちが大きいにある」という主張からも明らかである。音は、ほんらい単なる感覚器官がもつひとつの知覚に過ぎないにもかかわらず、すべての動物とくに人間は、不慣れな音や異常な音に対して用心深く神経質になる。「この効果もまた、あまりにも容易にしかも即座にもたらされるため、過去の観察や経験という記憶に頼るところがまったくない、自然の作用 the hand of Nature によって直接印象付けられた知覚の本能的な示唆である、という明らかな証拠を提供している」(ES. 87) とスミスが主張するのは、当然のことなのである。

したがって、論文「外部感覚について」の最後のパラグラフが、「自然が動物に与えた視覚、聴覚、臭覚という三つの知覚は、我々の身体の現実の状況に関する情報というよりもむしろ、我々の身体から離れているが、現実の状況に遅かれ早かれ影響を及ぼし、最終的に利益または害をもたらすにいたる可能性を持つ外部的なモノについて、我々に知らせるためのものであるように思われる」(ES. 88) という、一見したところ「しまりがいい」ように見える主張で締めくくられた理由は、こうであろう。単独的であれ複合的であれ、動物の知覚というものは、そもそも単なる「観察と経験」の産物に過ぎないと理解するわけには行かず、生得的な能力である「本能」の存在を想定するほかに理解しようがないのであって、しかも、この本能は自分自身の現実的な位置情報の認識だけでなく、自己保存にかかわるような将来の情報も含まれているという驚くべき観察を、スミスが試みていたということだ。

もとより、このような本能の認識による経験主義批判がなされていたという事実をもって、ロック、バークレーやヒュームによって定式化された経験主義的認識論をスミスが「放棄した」と理解してはならない。「我々が、このような種類の単純な知覚と複合的な知覚とを区別するよ

うに学習するのは、本性 nature によってなのであろうか、それとも経験によってであらうか。それはまったくのところ経験によるのであり、感覚器官に同時に作用を及ぼす味覚、臭覚および聴覚はすべてごく自然に純粋知覚と複合的知覚を感じ取るのだ、と信じる気持ちを私は強くもっている」(ES. 32) と、スミス自身が明確に述べていたからである。

その意味で言えば、スミスは「もっぱら慣習論者的認識論の立場にある」というリンドグレンの指摘 (Lindgren 1969, 901) は正しい。だが重要なことは、味・匂い・音・熱さと冷たさに対する知覚という4つの感覚作用について哲学者が一般的に想定してきたことは、「一般的に、そのような刺激物体が直接にこのような知覚を生み出すのではなく、一つもしくは二つ以上の中間的な原因の介入によってそれが生み出されるということであった」(ES. 36) という言葉に続けてスミスが指摘した、以下の主張の意味を見逃さないことである。大気の振動である音波が聴覚器官を刺激して音として知覚されるという中間的原因 intermediate cause をさらに掘り下げて、「音源物体の作用開始時と聴覚器官の作用の開始時との間の時間経過は、弾力をもつ空気と同密度の流動体の衝撃ないし振動が自然に伝播する速度に対し完全に相応する」²⁹⁾ とニュートン卿が説明したと指摘した (ES. 41) 後で、つまり「視覚について」の考察を開始する直前のパラグラフで、自らの関心の所在を次のように表明していたからである。

哲学者が我々の感覚器官を、感覚器官を刺激する遠くの物体と結びつけようと努力してきた中間的原因とは、このようなものである。このような中間的原因が、我々の感覚器官を刺激すると推定されるさまざまな動きや振動によって、そのどれもが振動や動きとほとんど類似性を持っていないこのようなさまざまな知覚をどのようにそこで生み出すのか、哲学者は誰もまだ我々に説明しようとしてこなかった。(ES. 42)

スミスの関心の対象は、知覚の対象物それ自体がもつ性質とは直接関係をもたない内容の知覚が個々の感覚器官に生じる理由、つまり認識＝知覚の中間原因・原理は何か、という点に向けられている。言い換えるなら、今まで哲学者が誰一人説明しようとしなかった心の仕組みそのものを問おうとしているのである。スミスがパークリーの『視覚新論』について、彼の分析に付け加えるものはほとんどないと述べたのは (ES. 43)、視覚の中間原因つまり光学装置としての「視覚」に関するパークリーの分析に限ってのことではない。視覚の対象が持つ性質とは異なった内容の知覚を感覚器官に生じさせる理由・中間原因を、あくまでも経験論的につまり「観察と経験」を通じて追究することが、論文「外部感覚について」が持つ固有の課題であったということだ。結果的にスミスは、人間を含めたさまざまな動物の「幼児期」における知覚＝認知発達プロセスを丹念に観察することにより、知覚＝認知の発展をすべて経験にもとづく観念連合と理解するロック・ヒューム流の認識論がもつ限界を見定めた、つまり動物における「本能」の存在という生物学的根本問題にたどり着いたということになる。眼という受光装置＝暗箱を通じて受け取った光

や色彩が神経を通じて脳に送り込まれ、視覚として「知覚される」のは確かだが、神経を通じて送り込まれた刺激は脳の中でどのように視覚として知覚され、動物の最も根源的な知覚である触覚とどのように関連付けられるのかという「中間原理」を解明していく上で、それぞれの動物がそもそも知覚情報を処理する「本能」——現代的に言い換えれば、遺伝的プログラム——を脳の中に備えて生まれてくるのではないかというスミスの疑問は、むしろ未解明の「中間原因」の存在を疑う徹底した経験論の立場から発せられたものなのである。

もとより、本能と経験とを論理的に共存不可能な対立的関係として捉えているわけでも、両者の共存関係の態様を説明しているわけでもない。基礎と発展、あるいは基底と上層という結合的な関係として理解しているだけである。その意味で言えば、スミスに対するリンネの影響も、過大評価されてはならない。あくまでも「観察と経験」をつうじて、自然の営み・秩序を構成する出来事の間さまざまな中間原因を解明していく上で分類学が持っている固有の意義を評価し、リンネによる自然観察の結果である体系的な動物分類を効果的に利用していただけである³⁰⁾。さらに、リンネ独自の植物分類であり、特にイギリスで賞賛された雄しべと雌しべの違いを基準にした「性の体系」としての植物分類そのものを、スミスが積極的に支持した文献的証拠も見当たらない。「生物学の研究は実を結ばなかった」と言うスミスの回想は、恐らくこの事情を物語るものであろう。世界中から植物を集め、農業や産業の発展にとって有利なものを探してスウェーデンに移植しようと試みたリンネの植物改良思想が、ジャガイモやトウモロコシの導入こそ新大陸発見がヨーロッパにもたらした最大の贈り物だと言うスミスの主張と一部重なることは確かであるが、重金主義的な見地からあらゆる農産物の国産化を計り、カメラリズムにもとづく国民主義的で重商主義的なリンネの近代化思想³¹⁾からスミスが影響を受けた形跡も類似性も、まったく存在しない。スミスとリンネとでは、そもそも自然や社会、国家の役割の理解が大きく異なる³²⁾。「リンネは自然と社会の両者を均衡状態としてモデル化し、しかも、両方とも“政策”によって平衡が作り出される。・・・我々が自然のチェック・アンド・バランスとかフィードバック・ループと考えているものを、リンネは国家という目に見え力強い手とイメージした。それゆえ、リンネの経済学は機械力学的な力であった」(Rausing 2003, 186)からである。

言い換えるなら、スミスが依拠したのは、動物の表現型と行動にかんするリンネの詳細な「観察」の集成だけだったのであり、それは、ビュフォンについても妥当する。『諸国民の富』ではビュフォンの『個別と一般の自然史』から2箇所引用があり、フランスでは豚肉の価格は牛肉の価格と殆ど同じという判断の典拠(WN. I. xi. 1. 9)と、サントドミンゴに住む胎生の四足獣で最大のものの名称にかんする言及(WN. IV. vii. a. 10)とである³³⁾。細部にわたってよく目を通しては明らかだが、『個別と一般の自然史』第2巻の「人間本性について」で展開された外部感覚・内部感覚および「心」をめぐる議論、さらに第4巻の「動物の本性に関する考察」のなかで展開された「外部感覚と内部感覚」をめぐるビュフォンの議論にスミスはまったく言及していないし、内容的に重なる議論を展開することもなかった。確かにスミスは、論文「外部感覚に

ついでに「内部的な知覚 internal sensation」について一度だけ言及してはいるが (ES. 21), それは「まだ解明されていない知覚原理 unknown principle of perception」と理解されているにすぎない (ES. 20)³⁴⁾。つまり、動物における「外部感覚と内部感覚」の関係を、外部感覚器において受け取った刺激が神経の「振動 ébranlement」として脳の中の「内部感覚器」にとどき、その強弱が快不快の原因となるばかりか長く強い「振動」は内部感覚器に記憶として残るというビュフォンの生理学的色彩が強い独特の「理論」も³⁵⁾、スミスがそれを読んだのは確実であるが、スミスがそれを活用した形跡は見当たらない。むしろ、味覚作用の中間原因の説明として「刺激物質がもつ一定の分泌液が口蓋にある吸収孔から入りこみ、その器官内にある興奮しやすく敏感な繊維のなかで、一定のゆれや振動を喚起し、そこで味という知覚を生み出すと看做す」デカルトの哲学に疑問を投げかけていることから分かるように (ES. 37), そもそもこのような生理学的な「内部感覚」の説明には懐疑的であったと見てよい³⁶⁾。

くわえて、この「内部感覚」という概念は、リンネが『自然の体系』第9版 (1756) まで使い続け、大増補した第10版 (1758) で使わなくなった概念であることをも考慮すると³⁷⁾、スミスの論文「外部感覚について」における「本能」の理解の仕方は、むしろスミス独自の認識論や科学方法論の帰結であると言ってよいだろう。「リンネはプラトンの哲学とトマス的な論理学に忠実であったが、ビュフォンはニュートン、ライプニッツおよび実在するものは個別だけだという唯名論の影響を受けていた」(Mayr 1982, 181) という E. マイアの主張が示唆するように、スミスが両者から距離を置いているように見えるのは、当然のことなのである。

III

加えて、スミスがたどり着いた「本能」概念および本能と経験との関連付けは、きわめて現代的なそれであることに、注意したい。スミスの本能をめぐる認識は、「鳥には、敵というものの知識が本能的に生まれつき備わっている」が、「自分の敵がどんなものかを生まれつき本能的に知らない一匹の鳥は、年長の経験をつんだ仲間から、どんな動物を敵として恐れるべきかを教わるのだ」(以上 Lorenz [1949] 1986, 47; 50: 訳84, 90) という 20 世紀を代表する動物行動学者 K. ローレンツの解釈とぴったり一致している。さらに、E. マイアのいう進化論的認識論、つまり「最も原始的な原生物でさえ、自分の生息環境において遭遇する危険や好機を感知し、反応するための装置を備えている。10 億年以上もの長きにわたる自然選択が、単純な原生物から人類へと、ヒトと言う種の遺伝的プログラムを精巧に作り上げてきた」(Mayr 1997, 74: 訳 89) という主張とも、まったく齟齬するところがない。C. ダーウィンが生物学で本格的に使い始め、T. ヴェブレンがその進化経済学で多用した「本能」概念は、ワトソン以降のアメリカの行動主義心理学によって 20 世紀中葉の 50 年間否定されてつづけてきたが、いまや「社会生物学——人間を含む動物の行動を進化論的視点から考える学問」³⁸⁾——の創設者で「科学の統合」を説く E.

O. ウィルソンや進化心理学者 S. ピンカーによって、再び生命を吹き込まれつつあるように見える。

言語は、人間の脳のなかに確固とした位地を占めている。言語を使うという特殊で複雑な技能は、意識的な努力も正式な教育がなくても、子供のなかで自生的に発達するものであり、その根本を形づくる論理を意識することなく展開され、どの人にとっても質的に等しいものであり、情報を処理したり知的に行動するためのより一般的な能力とは明確に異なっている。このような理由から、一部の認知科学者は言語を「心的能力」「精神的な器官」「神経システム」「演算モジュール」などと呼ぶ。しかし私は、時代がかった言葉ではあるが、“本能”と呼びたい。本能と呼べば、クモが巣の作り方を知っているのと同じような意味で、人間も言語の使い方を知っている、と言う見方が伝わりやすい。(Pinker [1994] 2000, 5. 訳 19-20 頁)

だが、「本能」概念は、たんに生物学的なもの——生物学では、あいまいであるという理由から本能という用語をあまり使わなくなった時期もあったが³⁹⁾、最近では E. ウィルソンのように積極的に使い始める研究者も増えている⁴⁰⁾——を意味するわけではない。そもそも「感覚 sense」それ自体が心理学の問題——心はどのようにはたらくか——であるばかりか、認識主体の内と外の区別にかかわる哲学上の基本問題——人間はどのようにして真実を認識するのか——でもあったから、ロックもヒュームも、当然「本能 instinct」について言及していたと思われる。

ロックの場合、初期には「衝動」とか「扇動」という意味で *instinct* (*instinctus*) が用いられていた (Locke [1954] 2002, 159; 165; 173)。『人間知性論』では、「生得的な自然法」や「生得的な実践原理」という理解や概念は完全に否定されただけでなく (Locke [1693] 1995, I. iii. 2-3), *instinct* つまり「衝動」は、「同情や反感という言葉と同様にあいまいな内容」(Locke [1693] 1995, III. xi. 8) でしかないとし唆する箇所が使われているほどである。さらに『統治論』では、人間は「知覚と理性」に、下等な動物は「知覚と本能」に導かれてそれぞれ自己保存に努めるのだという指摘から分かるように、「本能」は理性を欠く動物の特徴であると理解されている (Locke [1698] 2002, 86)。含意としてみれば、「臭覚は本能 *instinct* つまり食欲とほとんど同類のもので、獣はとりわけそれに長けている」(Buffon [1753] 1954, 325) と述べたビュフォンと共通すると言ってよいだろう。もともとロックは若いときに医学を勉強し、植物分類学ばかりか生物学にも詳しくあったから (Sloan 1972, 21), 『人間知性論』のなかで生物学的な比喩を多用し、それを「種の不変性に関する生物学的な議論の土台を掘り崩すための間接的な論拠に使った」(Mandelbaum 1964, 43) ことも不思議ではない⁴¹⁾。とはいえ、スミスと同様に誕生後の子供の成長過程の観察からロックが導き出した基本的な主張が、繰り返し知覚することを通じて多くの観念を体得し、しだいにますます目覚め、ますます多く思考し始めるというもの (Locke [1693] 1995, II. i. 20-22), つまり人間は「白紙 white paper」の心で生まれる (Ibid., II. i. 2) という徹底した経験論⁴²⁾であったことから

判断する限り、ロックは、スミスとは違って、心はどのように生まれるのかという問題に思いを寄せることが少なかったのであろう。

他方ヒュームは、『人性論』『人間知性研究』『道徳原理研究』の中で、動物も人間と同様に経験から学ぶだけでなく、「本能」を持つと繰り返し指摘している。「正義が明らかに公共の利益を促進し、市民社会を支える傾向をもつように、正義感は、その傾向に関する我々の反省あるいは、空腹、渇きその他の身体的欲求、怒り、生命愛、子孫への愛着、およびその他の情念のような、有益な目的に役立てるために自然が人間の胸のなかに鑄込んだ単純で本源的な本能 a simple original instinct から生じる」(Hume [1751] 2004. III. 40) という主張から分かるように、ロックに較べればはるかに「生得的な能力」という意味に近い本能の捉え方になっている。加えて、「本能としては異なったものだが、人間に火を避けるように教えるのも、鳥にまったく同じ正確さで巣作りの技法や育児の営みや習慣の全体を教えるのも、やはり本能なのである」(Hume [1748] 1999, IX. 6) という人間と動物の間の連続性・関連性を重視する主張から窺われるように、ヒュームの本能理解には、現代生物学の見地から見ても、ほぼ妥当と言える主張が随所に散見されるからである。しかし同時に、「ご褒美と科罰をうまく組み合わせる動物の飼育や躰けは、動物の自然な本能や性向を完全に押さえ込む活動」である (Hume [1748] 1999, IX. 3) という指摘から分かるように、観察としてはしっかりしているが、現代の動物行動学的見地から見た場合、基本的な因果関係のとり違いが残っている。賞罰の原理を使いながらなされる飼育や躰けは、必ず「本能や性向」を利用し促進するからこそ可能になるのであって、「押さえ込む」ように見えるのは、さまざまな本能や性向をうまく利用し、組み合わせた「結果」に過ぎない⁴³⁾。さらに、人間の理性と「動物の本能」はともに「同じ原理に還元しうる」と捉えた上で、「理性は人間の精神のなかにある驚異的で理解不可能な本能に他ならず、特定の状況や関連性のなかで、それが一連の観念を我々にもたらし、それに特定の属性を付与するのである。この本能は、疑問の余地なく、過去の観察と経験から生じる」(Hume [1739-40] 2001. 1. 3. 16. 9) という主張によく窺えるように、生得的な能力=プログラムと後生的な能力=理性との区別が不明瞭になってしまうという、もう一つ別の欠陥を抱え込んでいる。スミスほど純化された本能の捉え方になっていないのである。

だがヒュームの場合、動物の「観察」という点で見ると、スミスに劣らぬ正確さと鋭さがあることも見逃せない。七面鳥とクジャクのオスに顕著な自己の美しさに対する優越感、馬が抱く己の速さに対する優越感、さらには飼い犬などに顕著な「よく知った、愛している人からの賞賛と愛撫」に欣喜するという事実をふまえて、ヒュームは「優越感と劣等感はんたんに人間の情熱 passion であるばかりか、すべての動物にまで及ぶものだ」と指摘した後で、以下のように主張するからである。

このような情熱の原因となるものは、人間が保有する卓越した知識と理解力を適正に斟酌した

上であれば、野生動物においても人間においてもほとんど違いがない。したがって動物は美德や悪徳というものをほとんど持たないばかりか、その観念も持っていないし、血縁関係を瞬く間に見失い、さらに権利や財産を認識する能力を持たないのである。この理由からして、動物の優越感や劣等感はそのすべてが身体の中に存在するに違いなく、心や外部対象のなかにありうるはずはない。だが、身体に関するかぎり、同じ資質は動物でも人間でも同様に優越感を引き起こす。つまり、この情熱の根拠は、美しさ、強さ、俊敏さあるいは他の有益であったり快適な資質にもとづいている。(Hume [1739-40] 2001, 2. 1. 12. 5)

要するにヒュームは、「任意の動物種について実行可能な実験と一致するかしないかを確かめていけば、一般にその真偽にかかわる証拠を引き出しうるだろう」という研究方法に従って「心の解剖」(Ibid., 2. 1. 12. 2)を試み⁴⁴⁾、人間に優越感と劣等感をもたらす内的な推進力 internal principles のすべては、あらゆる動物について共通するという立場を堅持している (Ibid., 2. 1. 12. 9)。こうみてくればなおのこと、論文「外部感覚について」で展開されたスミスの「本能論」が、哲学的・心理学的アプローチにもとづいたロックやヒュームのそれに較べて、はるかに生物学方法に徹した議論であり、その分だけむしろ現代生物学における本能の理解との整合性が高い認識になっていることが、十分に確認できると言ってよい⁴⁵⁾。もとより、ここで生物学的とは、行動を究極的に遺伝子あるいは遺伝子に書き込まれたプログラムとの関連で理解するという意味であり、心理学的とは、行動を「心の働き」あるいは生理学的な知覚作用と結び付けて理解する、という意味であるが⁴⁶⁾。

IV

以上の「本能」あるいは「本能的」という概念を中軸にしたスミスの考察は、その執筆(完成)がおそらく1768年以降の時期、つまりカーコーディーで『諸国民の富』執筆開始以降の作品であると推定することが妥当と思われる論文「外部感覚について」の後半部で展開されたものである点で、時系列的な文献的証拠としてはなお不確定な要素が少なくない。刊行時期が明確な著作に限定して「本能」概念を再検討し、その結果が前節での理解と共通性・一貫性を保ちうるかどうかを確認しておく必要がある。「本能」概念が最初に登場するのは「エジンバラレビュー 同人宛の手紙」であった。

両者 [ルソーとマンデヴィル] は共に、人間は仲間との交友 society それ自体を絶えず求めるように促す強力な本能を持っていない、と想定している。したがって前者は、原始状態が悲惨であるからこそ、他の場合なら決して同意し得ないような矯正手段の採用が人間に強いられるのだと説明するし、後者は、何らかの不運な出来事が、それまで人間がまったく知らなかった不自然極まりない功名心という欲望や虚栄心に基づく優越への願望を生みだし、結果的に同様

の致命的な結果を生み出した、と説明するのである。……両者の考えによれば、現在人類の間に存在する不平等を擁護している正義の法律というものは、もともと集団構成員に対する不自然で不当な優越性を獲得し維持するための発明であった、ということになる。(LER, 250-51)

「本能」に関する自らの主張をポジティブに述べたところではないが、主張の意味から判断する限り、スミス自身が「人間は仲間との交友それ自体を絶えず求めるように促す強力な本能を持っている」と考えていたことは間違いない。この「本能」理解が、ロックはおろか、先に指摘したあいまいさを残すヒューム的な意味での本能、つまり「動物的な衝動ないし情動」という伝統的な意味を超えていることは確かであろう。そして、表現の仕方こそ対照的だが、『道徳感情の理論』においても、内容的には「同人宛の手紙」のそれと同一内容の「本能」概念を見ることができ。

人間は、社会の繁栄と存続を自然に望むような資質を付与されているが、自然の創造主がそのような資質を人間に付与したのは、この所期の目的を達成させる適切な手段が一定の刑罰を与える事だ、と理性を働かせて理解させるためではない。逆であって、所期の目的を最も上手く達成するような努力を、直接本能的に賞賛するような資質を与えることによってなのだ。自然の営み the oeconomy of nature は、この点で、多くの他の事例で生じる事と完全に一致している。……自然はこのように、自然が提示した目的を自ら喜んで追求するような資質をつねに人間に授けてきただけでなく、同様にまた、その手段に頼りさえすれば、手段自体が自動的に、しかもそれを生み出すための手段自体のもつ傾向とは無関係に、この目的を実現できるような資質を人間に授けてきたのである。要するに自己保存、したがってまた種の増殖は、自然があらゆる動物を育む際に企ててきた偉大な目的であったと思われる。(Smith [1759] 1976, TMS. II. i. 5. 10)

ここには、二つの注目すべき主張がある。第一に、刑罰を手段に使うことで人類の存続と発展を図らせるのではなく、所期の目的を上手く達成する努力を直接本能的に賞賛する資質の付与をもって行なわせようとした「自然の創造主」の意図こそ、完全に「自然の営み」と一致しているというスミスの主張は、マンデヴィルとルソーの主張に対する根本的な批判である。すでに指摘しておいたように、両者は真反対の「自然状態」を想定しておきながら、結局両者が共通に引き出した結論とはいえば、「正義の法」というものは、不平等を擁護し不自然で不当な優越性を獲得・維持するための発明であったという点で、まさに共通の根拠・前提に立っていたからである。スミスの批判は、両者がそれぞれ想定している「自然状態」の内容ではなく、理性と正義のもつ意味と作用の理解に向けられている。つまり「所期の目的を達成させる適切な手段が一定の刑罰を与える事だ、と理性を働かせて理解させるためではない」という批判を支えているのは、生命体

には種の存続という目的の達成を「本能的に賞賛する資質」が普遍的に鑄込まれている、という認識なのである⁴⁷⁾。

第二に、この『道徳感情の理論』初版の「本能」概念は、1790年に刊行された第6版でも維持されたばかりか、いっそう明瞭に「生得的な」特徴であると理解され、むしろ強調されるようになったと思われる⁴⁸⁾。第7部つまり第6版で追加した部分でスミスは次のように述べる。

幼児には、話されたことをすべて信じるという本能的な気質があるように見える。自然は、幼少期の間面倒を見てくれ、最初期の最も不可欠な部分を形づくる教育をしてくれる人に対して、少なくともしばらくの間、絶対の信頼を寄せることが幼児の自己保存にとって必要である、と判断したように思われる。それゆえ、幼児の信じ易い性質は度を越えており、彼らに適正な程度の謙虚さと疑念を教え込むためには、長くかつ多大な人間の嘘や誤った信念 falsehood を経験することが必要になるのだ。(Smith [1759] 1976, TMS. VII. iv. 23)

内容的に良く似た主張は論文「外部感覚について」にも見られるが⁴⁹⁾、「幼児の信じ易い性質は度を越えており、彼らに適正な程度の謙虚さと疑念をしつけるためには、長くかつ多大な人間の嘘や誤った信念 falsehood を経験することが必要になる」というスミスの主張は、確かに一面で現代流の「学習」や「適応」と呼ぶプロセスを意識しているとはいえ、決して単純な内容ではない。

「本能」あるいは「本能的な」という概念が『道徳感情の理論』第6版増補の時期、つまり1790年でも変ることなく保持されていることは明らかである。しかし、人間性つまり人間の心の成長は「長くかつ多大な人間の嘘や誤った信念 falsehood を経験すること」を通じて初めて可能なのだという上でなされた主張は、従来スミスの社会形成論のひとつの特徴として指摘されてきた「欺瞞 deception」理論、つまり人間というものは直接目に見えて感じ取ることができる「直接原因 efficient cause」に導かれて結局は意図せざる結果としての「究極目的 final end」を達成する、というロジックとはまったく別の「欺瞞」理論であるといわねばなるまい。すなわちそこには、長くかつ多大な人間の嘘や誤った信念 falsehood (欺瞞という意味もある) を経験して始めて人間は「適度の謙虚さと疑念」を身に着けるのだ、という注目すべき人間性の理解が埋め込まれているからである⁵⁰⁾。

加えて、上の引用文の2パラグラフ後でなされた以下の言語と本能に関する主張を読めば、スミスのいう「本能」概念が、現代の進化生物学で「遺伝子に書き込まれたプログラム」と言い換えられうるような意味で、明確に把握されていることが分かってくる⁵¹⁾。「本能」という基礎の上に、「言語」というプログラムが展開するというのであるから。

信じようとする欲求、さらに他の人々をその気にさせて誘導し、説得しようとする欲求はすべ

ての人間の自然の欲求のうちで最も強い部類の一つであると思われる。恐らく、それは人間性を特徴付ける能力である会話能力を支える土台である本能なのだ。他のどんな動物もこの能力を持たず、したがって他の動物のなかに、仲間の判断や行動を指導したり仕向けたりしようという欲求を見出しえないのである⁵²⁾。(Smith [1759] 1976, TMS. VII. iv. 25)

信じようとする欲求や他人を説得しようという欲求が「人間性を特徴付ける能力である会話能力を支える土台である本能」であるという1790年になって初めて明確にされた点は、スミスの本能論の理解が現代の進化生物学的な人間性の理解と同一であるという事実の根拠として重要であるだけではない。むしろ、『諸国民の富』では、最後の版にいたるまでけっして「本能」という概念そのものが一度も使用されなかった、という一見理解に苦しむような事実を内在的に解釈するための重要な手がかりを与えているという事実、ここでは大きな意味があるのだ。換言するならば、スミスにとって人間性の究極の根拠は、「人間性を特徴付ける能力である会話能力を支える土台である本能」＝「信じようとする欲求」や「説得しようとする欲求」に求められていたということであり、言語能力や理性はその基礎の上に構築されるより高次の人間性の特徴と理解されているのである。

『諸国民の富』第1篇2章の冒頭では、周知のように「交換本能」ではなく「交換性向 the propensity to truck, barter and exchange」という概念が用いられていた⁵³⁾。すなわち、「分業とは実に多くの利益を引き出ししてくれるものだが、もともとこれは人間の英知——それがもたらす一般的な富裕を予見したり意図したりするような英知——の産物ではない。それは、そのような広範な有用性など思いつきもしないような人間性のうちのある性向がもたらす必然的な帰結であって、あるものを他のものと取り引きし、やり取りし、交換するというこうした性向が極めてゆっくりと、徐々に作り上げたものなのである」(Smith [1776] 1976, I. ii. 1) というからである。「性向」と「本能」は同じ意味であろうか、それとも区別されているのであろうか。

手がかりは、続くパラグラフの中にある。「このような性向が、ここではこれ以上詳論しえない根源的な人間性に属するものか、あるいは理性と言語能力の必然的な帰結であるのかという大いにありそうなことも、当面の研究課題ではない」(Smith [1776] 1976, I. ii. 2) という指摘がそれである。

そもそもスミスが「本能」という場合、前節の考察から明らかなように、程度に違いはあるにせよ他の動物も共通に持っている、現代の進化生物学で言うような生得的なプログラムのようなものが意味されていた。それとは対照的に、「交換性向」は「人間であれば普通に見られるが、他の動物種ではまったく見られないもの」とされている。つまり交換性向は、人間だけに限られ、他の動物にはない「性向」であるとスミスは主張しているのである。言い換えれば、「仲間の好意をえるため、ありとあらゆる卑屈で媚びへつらうような献身的な振る舞い」をするという人間と犬の間にみられる共通性こそむしろ「本能」である——既に指摘したように、スミスは、

人間は「仲間との交友 society それ自体を絶えず求めるように促す強力な本能」を持つと信じていた——という理解が一方にあり、他方で、「交換性向」は人間だけの特徴だという理解があるということになる。

しかし、現代の生物学つまり生物行動学の成果によれば、チンパンジーやボノボといった霊長類に代表される社会的動物つまり「交友を求め、それを楽しめる動物」(de Wall 1996, 170: 訳 285)は「互恵性 reciprocity」つまり「互恵的利他主義 reciprocal altruism」の原理に基づいて行動しており、構成員である個体が「与えたり、受け取とられたりする好意の経過を記憶しておく心的能力」を保持していることが分かっている (de Wall 1996, 153-54: 訳 261)。ということは、集団を形成する個体が「好意のやり取りの経過を記憶する心的能力」を持っていさえすれば、さらに純粋に「好意 favor」のやり取りというレベルであれば、およそ「交換性向」はあらゆる社会的動物に共通する心的能力=本能であるということになる。実際、「我々にとって不可欠な互恵的で申し分のない援助の大部分をたがいに確保するための手段が、交渉・交換および購買である」(WN. I. ii. 3) というスミスの主張から分かるように、社会的動物である人間が生きていくためには「互恵的」な援助の繰り返しが不可欠であることを、彼は明瞭に理解していた。その上でなお「交換性向」は、「人間であれば普通に見られるが、他の動物種ではまったく見られないもの」と主張しているわけであるから、結局、『諸国民の富』執筆時のスミスは、人間が社会的動物として持っている本能と人間だけが持つ交換性向との間の関係を、『道徳感情の理論』第6版への増補執筆時ほど確信を持って捉え切れていなかったため、「このような性向が、ここではこれ以上詳論しえない根源的な人間性に属するものか、あるいは理性と言語能力の必然的な帰結であるのかという大いにありそうなことも、当面の研究課題ではない」と、問題そのものをひとまず棚上げしたのではなかろうか⁵⁴⁾。

おそらく『諸国民の富』執筆段階のスミスは、まだ確信を持って「信じようとする欲求、さらに他の人々をその気にさせて誘導し、説得しようとする欲求はすべての人間の自然の欲求のうちで最も強い部類の一つであると思われる。恐らく、それは人間性を特徴付ける能力である会話能力を支える土台である本能なのだ」と主張できるほどに至っておらず、むしろ「他人の利己心」への訴えかけが持つ重要性を強調することによって、社会性動物に特有の本能的な心的能力である「互恵性」の原理を説明したように思われる。すなわち、スミスが「交換性向」のレベルで言及している利己心は、そもそも「他人の利己心」へ訴えかけるという意味であって、自分自身の利益だけを考慮すれば良いという性質のものではない。利己心は単独で独立的に作用する内部的な原理・推進力としてではなく、そもそも仲間・集団内の他者に働きかけて「説得する」ための「関係的」で外部的な原理・推進力として提示され、理解されているからである。それは以下の主張の中に明瞭にうかがえるところである。

人間は、ほとんどいつでも仲間の助力が不可欠だが、好意にもとづく助力を期待するだけでは

良い結果は得られない。彼に有利になるように、彼らの利己心に訴えかけることができれば——彼のして欲しいことをすることが彼ら自身の利益になる、と彼らに知らせることができれば——、ずっとうまく説得できるだろう。これは、他の誰かと何か取り引きしようとする時、誰でも試みることである。(WN. I. ii. 2)

とすれば、「人間性を特徴付ける能力である会話能力を支える土台である本能」として「信じられたいという欲求、さらに他の人々をその気にさせて誘導し、説得しようとする欲求」を挙げた『道徳感情の理論』第6版増補時、つまり最晩年にいたってスミスが到達した独自の「本能」理解を意識的に持ち込んで再解釈すれば、『諸国民の富』でスミスが言う「交換性向」の概念装置が持つ意味は、以下のように要約できることになる。

「交換性向」は、「仲間の好意を得るために献身的な振る舞いをする」という社会的動物に共通にみられる普遍的・一般的な本能を「土台」にしている——「好意のやり取りの経過を記憶する心的能力」一般に基づく——が、人間の場合に交換するのは「好意」だけではなく、むしろ「モノ」である。したがって交換性向は「モノ」の量や種類の区別を明確に認識し、「契約」を結ぶ（ここでは言語が決定的に不可欠だ）心的能力を持つ人間だけにみられる特徴である。そうであるかぎり、スミスのいう「交換性向」が「本能」と同次元の概念でないことは確かだが、そこに普遍的・一般的な「本能」としての意味や性質が最晩年のスミスほど明確ではなかったにせよ、実質的に、あるいは無意識のうちに「土台」として組み込まれていることは確かであろう。社会的動物固有の本能が土台となり、交換性向はその上に展開した性向なのである。その意味でいえば、スミスは、「理性は人間の精神のなかにある驚異的で理解不可能な本能に他ならず、特定の状況や関連性のなかで、それが一連の観念を我々にもたらし、それに特定の属性を付与するのである。この本能は、疑問の余地なく、過去の観察と経験から生じる」(Hume [1939-40] 2001, 1. 3. 16. 9) というヒュームの主張の前半を承認し、後半を疑問視したことになる⁵⁵⁾。むしろこのように、人間は他の社会性動物と共通する本能を「土台」として持つだけでなく、それを基礎・土台として会話（言語）能力の獲得によって固有に人間だけが持つようになった人間本性を「交換性向」と捉えたところに、スミスの独自性・卓見があると理解すべきなのである。

だが、さらに重要なことは、「自己保存すなわち種の増殖は、自然があらゆる動物を育む際に企ててきた偉大な目的であった」(Smith [1759] 1976, TMS. II. i. 5. 9) という指摘と重ね合わせれば分かることであるが、「種の存続と繁栄」という目的因あるいは究極目的 the final cause の達成は、「互恵的利他主義 reciprocal altruism」＝「互恵性」の支柱としての「交換性向」が存在する場合には、たとえそれぞれの個体が自由に作用因 the efficient cause としての自己利益を追求したとしても、個体の集合である「個体群」＝集団の「共同の資産」がつねに個体の能力の単純な総和以上にまで高められることによって実現されやすくなる、という事実をスミスが明確に見抜いていたということにある。

マスティフの力強さは、グレイハウンドの俊敏さ、スパニエルの利口さ、あるいは牧羊犬の従順さのいずれによっても、何ら援助されるどころがない。このようなさまざまな才能や素質の効果は、交換し、取り引きしようとする力や生来の気質が欠如しているため、^{コモン}共同の資産にはなりえず、種全体が享受しうる気の利いた実用性や便宜性の改善にはまったく役立たない。それぞれの動物は個々別々に自らを支え、守り続けなければならない、自然がその仲間を区別した才能の違いから、何の恩恵も引き出していない。これとは逆に、人間の間では、似ても似つかぬ才能が互いに役に立つ。それぞれの才能のさまざまな生産物は、交渉し、交換し、取り引きしようとする一般的な生来の気質によっていわば共同の資産になり、他人の才能が生み出した生産物の一部なら、自分が必要とするあらゆるものを、誰でもそこから購入できるのである。
(Smith [1767] 1976, I. ii. 5)

マスティフ、グレイハウンド、スパニエルなどという「種別」は、決して「自然」がつくり出したものではなく、育種家の「人為的選択」の結果に過ぎないという事実をスミスが意識していない、という意味で大きな限界をもつことは確かである。だが、ここでの主張が、種を構成する個体と個体群としての種との間の概念的関係を明確に区別した上で、「自己保存」と「種の存続」とをともに「共同の資産」の増加という観点から展開されていることは間違いない。言い換えれば、ここで重要なことは、存続と繁栄と言う「所期の目的を最も上手く達成するような努力を、直接本能的に賞賛するような資質」だけでなく、社会性動物に強く現れる「互惠的利他主義」＝「互惠性」が、言語能力に裏打ちされてあらわれる「交換性向」を生得的に保持するが故に、人間は、種の一員としての個体間の能力の違いを、分業の発展を通じて種全体＝社会の共同の資産を増加するために役立てうることになり、結果的に「種全体が享受しうる気の利いた実用性や便宜性の改善」を実現していくことができるのだ、とスミスが理解していたということである。進化生物学的なアナロジーを用いて言えば、『諸国民の富』とは、個人の利益＝自己保存という「至近原因 proximate cause」と社会の利益＝種の存続という「究極原因 ultimate cause」との間を結びつける「中間原因」を、独自の本能論をベースに置いた経験論的「観察」にもとづいて解明し、関連付けようとしたものである、ということになる⁵⁶⁾。

だが、このように、スミスの科学方法論が現代の進化生物学の方法や発見と大きな齟齬をきたさないという意味で「生物学的」であったことが確かだとしても、それが『諸国民の富』の理論的分析のなかでどのように活用され、結実したのかという点にさらに関心を持つ読者も少なくないだろう。「交換性向」を本能的な特質と捉えること自体が、そもそも人間を社会的集団の一員として、しかも、仲間である他者に対して互惠的な行動を取るように彼らの利己心に「訴えて説得する」ような本能を持つ動物である、と理解していることを意味する。そのかぎりでは、『諸国民の富』もまた、『道徳感情の理論』と同様に、けっして単純な原子論的社会観に基づいているわけではなく、社会的動物を特徴付ける「個体と集団」の関係、つまり現代の進化生物学や社

会生物学が強調する「互恵的利他心」をもつ動物=人間の理解に基づいて展開されているとあってよい。もちろんこれは、いわゆる利己心と利他心の基本的対立という「アダム・スミス問題」そのものの存立に関して根本的な問い直しを迫る問題であるが、とりあえず本稿では、従来の研究史ではあまり議論されてこなかったいくつかの具体的な事実を指摘し、この基本的な問題をより具体的な次元で解明していくための手がかりを提示しておこう。

V

第一編 11 章に加えられた長い「銀価値の変動に関する余論」の「結論」で、スミスは言う。「ジャガイモとトウモロコシつまりインディアン・コーンと呼ばれているものは、ヨーロッパの農業、すなわちヨーロッパ自体が商業と航海の大拡張 [アメリカ大陸の発見のこと——引用者] から受け取った恐らく二つの最も重要な改良である」(Smith [1766] 1976, I. xi. n. 10)。そもそこの「余論」は、新大陸発見後に生じた銀の大量輸入の影響つまり前後ほぼ4世紀にわたるヨーロッパの経済発展の原因・結果の詳細を解明するために書かれたものであるが、基本的にその真の原因は、銀の大量輸入に起因する銀価値の下落=物価上昇にあったのではなく、土地の耕作の進展と製造業における生産性の上昇と自由の進展に基づく市場=需要の拡大にあった、という主張が展開されたところである。

スミスの科学方法論、すなわち「哲学は、自然のさまざまな結合原理をめぐる科学である」(HA. II. 12) とか、「哲学、すなわち世界で起きているさまざまな変化を全体として結び付けようと努力する科学」(ALM, 1) というスミスの主張になぞらえてこれを言い換えれば、ヨーロッパにおける「貨幣の増加」と「富裕の実現=経済発展」との関係は、「慣習にしたがって人間の想像力が自然にそう考えてしまう」、つまりこの二つの現象が「事物の自然の経路に完全に従っていて、それらを結びつけるための中間的な事柄など必要ない」と理解してしまう類の皮相な「自然の体系 system of nature」に対する批判である、ということになる。要するにスミスは、直接食料の価格を下落させた要因の大部分はジャガイモの普及であり、間接的に食肉価格を低下させたのは家畜の餌であるトウモロコシ栽培の普及である、という事実を指摘したかったということなのだ。

第11章地代論で、食料生産と価格の関係として展開された経済発展論は、まさに世紀をまたがる長期間の穀物価格変動の「中間事象と原因 intermediate events and cause」に関する生物学的視野からの研究成果とみてよい。すなわち、「世界が始まって以来、パンは人間の体のありふれた栄養物であり、きわめて長期間それが肉や骨といふどこから見てもパンに似てもつかない物体に変わっていくのを毎日眺めてきたため、この変化をもたらす中間的事象のプロセスがどのようなものなのかを探究する好奇心を、哲学者はほとんど持たなかった」(HA. II. 12) という哲学=科学研究にたいする鋭い批判と反省をふまえた、彼自身の研究成果と理解できる。スミスが『諸国民の富』とくに第一編 11 章を中心に、生物学的見地から解明するに至った経済発展のプロセ

スにおける価格変動の「中間現象と中間連鎖 intermediate chain」の骨子は、おおよそ次のように要約できるからである⁵⁷⁾。

未発展の社会段階では、猟師や漁師が提供する食肉が「多く存在する」=低価格である。食肉が維持・扶養しうる労働量は小さいが、食肉を入手するために必要な労働の量もまた小さい。人口密度が極めて希薄な未開社会段階においてのことである。しかし、改良と耕作の進展によって穀物生産が増えると、穀物が維持・扶養しうる労働量は食肉のそれよりも大きいから、社会全体としてみれば、食料が維持しうる労働量つまり人口は加速度的に増加する。だが、やがて維持しうる労働量の点で劣る食料である食肉に対する需要が増加し、高価格になる。食肉が「贅沢品」になるからである。この穀物と食肉との間に成り立つ関係は、土地利用に代替性をもつ他のすべての土地生産物について成立する。必需品の生産性が向上した分だけ贅沢品や奢侈品の生産が増加することになる。

人間は、穀物だけを食べても十分に肉体と健康を維持できる。この生き方を選択すれば、労働のために犠牲にする部分が占める「自分自身の安息、自由および幸福の全体」に対する割合は低下しつづける。労働は限りなく短縮されるか、すくなくとも「犠牲」ではなくなるだろうが、人間は物質的な幸福の追求を止めない。農業よりも製造業の方が分業の導入が容易であり、生産性向上のスピードが速いから、製造業の生産物価格は急速に低下しつづける。以前は贅沢品であったものが次々と必需品に組み込まれていくことになる。結果的に、衣・食・住という必需品の大衆的消費が進み、まさに豊かさが社会的に実現されて行くが、この経済発展の経路の中では必然的に食料価格が相対的に上昇するはずである。ところが、それを大幅に緩和し、経済発展を一段と加速化したのが、エネルギー効率の良いジャガイモとトウモロコシの導入であった。それゆえスミスは、「ヨーロッパ自体が商業と航海の大拡張から受け取った恐らく二つの最も重要な改良」は、ジャガイモとトウモロコシだと指摘したのである。スミスの経済発展論は、このように、土地単位あたり・投入労働量単位あたりの食料産出量と単位あたりの食料の栄養(カロリー量)に注目して組み立てられている点で、まさに生物学的な「自然のシステム」の理解なのだ。

さらにスミスは、職業の専門化が進展すると機械の発明が学者に固有の仕事になること、つまり科学的な知識の量が増加しつづけるのも分業の結果なのだ、と主張していた(WN. I. 9)。自然史、自然哲学、抽象的な科学における進歩、つまり個々の学者の「無垢な好奇心 innocent curiosity」にもとづく観察や考察の結果が「社会的に蓄積される共有の財産」になっていく(LEP. 9-10)という主張から分かるように、分業によって高度化し続ける生産性向上のメカニズムそのものが社会に「共有の財産」である、とスミスは捉えていた。スミス独自の「知識資本」論、すなわち「教育、研究、修行によって身につけられる」技能は機械・建物・改良された土地につづく第4番目の「固定資本」、つまり「人間の体に固定化し実現された資本」であり、「個人の財産であると同時に社会の財産でもある」(WN. II. i. 17)、という主張の定式化である。

だがそうだとすれば、スミスの言う「自然の秩序」と科学の関係について、さらに興味ある事

実に気付くことになる。積み上げられていく「経験と観察」にもとづく知識の総体が生産性の普段の向上の源泉であるという理解は、力学的で還元主義的な社会観を超えたものである。『諸国民の富』の自然価格論に着目するだけなら、経済社会を力学的なフィードバック・システム(自立的なシステム)になぞらえて捉えた、という解釈で十分であろう。システムの安定や均衡はそれで十分に保障される。だが、経験と観察にもとづく社会的共同知識としての科学は、「無垢な好奇心」の發揮・発現が許されておりさえすれば、観察的知識の全体を形式論理的に統一して特定の「体系」(クローズドシステム)に閉じ込めようとする力で抑制されでもしないかぎり、無限に累積・増大しつづける。知識のシステムも経済のシステムも、ともに拡大し続けるから(ポジティブ・フィードバック)、結果的に産業の生産性も無限に上昇し続ける。そもそも発展の理論は、進化生物学の理論と同様に、基本的にオープンシステムの理論でなければならない⁵⁸⁾。科学の発展とは、人間が社会の「共有財産」である知識を無限にたくわえ、豊富化していくことなのだ。スミスによる人間と社会の分析は、力学をうちに包み込んだ生物学的な科学として構想されていたのである。

注

- 1) スミスの思想は、「力学や流体力学、サイバネティックスのモデルよりも、生物学的なモデルによる方が良く理解できる」と明確に指摘したのはJ.R. リンドグレンであったが(Lindgren 1973, 58-59)、最終的に彼は、スミスの思想を「心理学」的な社会理論つまり「社会心理学の体系」として評価しようとしたため(とくに第3章)、問題提起を十分に生かすことが出来なかったように思われる。
- 2) 期間が1990年代後半までに限定されているとはいえ、田中(1997)「序章 アダム・スミス復興の背景と動向」で、要をえた豊富な研究史の概観がなされている。参照のこと。
- 3) 自然選択を担い実現していく基本的単位は、個体ではなく群つまり集団 population である。生物を「群ないし集団」として捉えることが、生物学的つまり科学的な進化論の確立に欠かせない前提であることについてはMayr(1988, 223-26; 訳248-51)を参照のこと。
- 4) 力学的アナロジーとして用いられるフィードバックとは、攪乱が生じた場合に、原因となる事象の反対方向への修正作用を自動的に生み出す作用つまり「ネガティブ・フィードバック」のことであり、通例、不均衡からの回復つまり自律的均衡化のメカニズムを指している。これに対して、理論的にはポジティブ・フィードバックもありうるのであって、それは均衡を乗り越えた攪乱と不均衡の累積的継起を意味し、体系は決して静止的均衡に到達することはない(以上、詳しくはMayr 1971, 2)。
- 5) 馬渡(1990, 20)は、出発点ないし前提が既知ないし立証済みの原理であり、演繹的推論がなされ、観察されたものを説明するという「ニュートンの方法」は、ニュートン独自の発明ではなく、むしろデカルトの方法であったと指摘している。スミスの方法がデカルト的であったというこの主張にまったく根拠がないと言うわけではないが、これではスミスの科学方法論の内在的解釈としてきわめて不十分であること、さらにスミスのデカルト哲学批判がかなり厳しかったことなど、以下本稿で次第に明らかになるであろう。
- 6) 本稿では「天文学史」をめぐる研究史には立ち入らない。詳細については只腰(1995)を参照願いたい。
- 7) 言語論に関する詳細な議論をする紙幅はないので、本稿での議論に直接かわるところを「言語起源論」から引用しておくに留めたい。「文法学者が換称 *antonomasia* と呼び、現代では必ずしも不可欠ではないのにまだ普通に使われるこのような言い方は、いかに人類が一つの対象に対してそれと類似性をもつ他のものの名前を与え、そもそもある個体を表現するためのものであったものによって全体を呼ぶ傾向を

- 自然にもっているかを、よく物語っている。このような種とか類別というもの——つまり学界では類と種と呼ばれているもの——をそもそもつくり出したと思われるのは、相互の類似性が当該の個体やそれが表示する名称に関する観念を自然に想起させる集団全体にたいする、このような個体名称の適用であった」(Smith [1767] 1983. FFL 1-2. 以下本稿ではこの論文を FFL と略記し、パラグラフ番号を併記する)。
- 8) この後者の意味での「分類学」概念を広めたのが進化論的経済学の提唱者 T. ヴェブレンである。そのことは、彼が新古典派経済学を「事物の正常状態にかんする論理一貫性に貫かれた命題群——経済分類学の体系」(Veblen [1898] 1919, 67) と特徴づけた事実の中に良く現れている。彼のいう「経済分類学の体系」とは、経済社会が歴史的に発展・進化するにもかかわらず、あくまでも伝統的・慣習的な理論的枠組みを前提し、歴史的に新たに登場してきた個々の「個別的事象」を、既存の理論的枠組みに組み込み、位置づけることによって新しい歴史的な事象を「理解」するような「経済学」のことであり、A. マーシャルの「準地代」、J. B. クラークにおける「動態」の「静態」への還元、さらに I. フィッシャーの「資本」や「所得」の分析などが例として挙げられている。
- 9) この事実は、『文学・修辞学講義』のなかで、スミスが演繹的方法の一つとしてニュートンの方法に言及していたことから、明らかである。「アイザック・ニュートン脚のやり方に習って、まず最初に既知の、あるいは証明済みの一定の原理を定めておき、そこからいくつかの現象を説明し、すべてのことを同じ連鎖の中で結合させることができるだろう」(Smith [1963] 1983, ii. 133)。
- 10) 東京大学経済学部所蔵の「アダムスミス文庫」に含まれるビュフォンの『自然史』は 1749 年にパリで刊行された *La théorie de la terre, du système de la génération et de l'histoire particulière de l'homme* 第 1 巻～3 巻の 1750 年版と、1766～71 年にアムステルダムで刊行された第 4～15 巻 (これは 1753-68 年に刊行された *L'histoire des quadrupèdes* の新版である)、および 1774～79 年発行の 6 巻の「増補」から成り立つ。第 4 巻の馬に始まり第 15 巻 (1768 年) までつづく「四足動物の研究」のかなりの部分はドバントンの執筆である。
- 11) 「スミス文庫」の第 1 巻から第 3 巻までの刊行年は 1750 年、第 4 巻が 1766 年刊行でオリジナルが 1753 年刊行) のものであることを考慮すれば、「読者への手紙」執筆時にスミスが言及していたのは第 3 巻までであった可能性が強い。もっとも、レオミュールの著書が「スミスの蔵書」に含まれていない (cf. Mizuta 2000) ことから分かるように、「蔵書」だけから確定的なことは言えない。
- 12) 第 4 巻に含まれる「動物の本性に関する考察」は、人間の基本的特徴である内部感覚 (これは第 2 巻の「人間の本性に関する考察」で分析されている) と動物も一般的にもつ外部感覚との関連性に関する詳細な独自の分析を含むが、「感覚の発達」に関する考察は含まれていない。
- 13) 東京大学経済学部所蔵のスミス文庫に含まれる版では、第 2 巻の 155 頁から「人間の自然史」が始まるが、この巻には乱丁があって、一部に頁の重複が見られる。なおチェセルデンによる白内障手術にかんするビュフォンなりの分析がなされるのは、第 6 節「視覚について」(Tome 3, 122-132) においてであるが、感覚器官としての内部感覚と外部感覚との関係が詳しく考察されるのは第 4 巻 (オリジナル版は 1753 年、スミス文庫版は 1766 年の刊行) の「動物の本性に関する論考」においてのことであり、LER でスミスが言及した「感覚の発展」の議論は、内容から判断しても、第 2 巻「人間の自然史」第 1 節「人間の本性について」とみてよい。この論考の中でビュフォンは、物理的な外的存在物を感覚的に受けとって神経を通して「衝撃」として伝える機関である「外部感覚」と、伝えられたさまざまな「衝撃」を総合し・統括する脳に存在する「内部感覚」を分離しておきながら、この内部感覚と人間だけが持つとされる「心 *ame*」= 思考と理性との関係についてはあいまいなまま、理性と「感覚の発展」を軸に人間本性について考察をくわえている (Buffon [1749] 1750, Tome 2; 155-162)。最後の点だけに注目すれば、それは人間の心だけがもつ知覚や省察の源泉を「内部感覚」と呼んだ F. ハチスンの理解 (Hutcheson [1747] 1990, 6-7) と共通するところが多い。
- 14) 『自然史』第 1 巻冒頭の *Premier discours: de la manière d'étudier et de traiter l'Histoire Naturelle* のことであるが、原典はどの図書館でも貴重書扱いのためアクセスが困難になっており、しかもアクセスも入手も簡便な William Smellie による英訳 Buffon (1791; 1812) では「随所で繰り返された内容である」と

- いう理由から、この「第一論説 博物学の研究方法および取り扱いについて」は除外されている。容易に参照可能なものとしては、フランス語については Piveteau 編の Buffon (1954): 7-26, 英語訳は Lyon and Sloan (1981): 97-128, 日本語訳は荒俣宏 (1991): 294-314 頁がある。
- 15) ビュフォンの思想全体については、J. ロジェによる『ビュフォン』(Roger 1989) が詳しい。
- 16) その意味で言えば、スミスがビュフォンに直接学んだところは多くなかったであろう。
- 17) ただし、このビュフォンによる批判はリンネの『自然の体系』第6版以前のものに向けられたものであるだけでなく、「分類」の背後にある哲学的・方法論的根拠や前提に向けられていることに注意したい。1782年になるとドバントンでさえリンネが1758年以降の版で用いた「綱」「目」「属」「種」の分類を採用し始めるし、ビュフォン本人も1760年代後半には四足動物や鳥について「属」や「科」への分類を承認するようになっていたが、分類の結果の承認が分類の根拠や方法という次元での「リンネの体系」の受容を意味したわけではない。詳しくは、Sloan(1976)を参照のこと。
- 18) リンネの『自然の体系』は、大判とはいえ本文わずか14頁の初版が1735年に刊行され、その後増補を重ねて1757年の第9版では227頁になるが、内容的には完全に専門家向けの分類をめぐる方法論の書に留まっていた。アマチュア向けの辞典としても利用できるように大拡張されたのは1758年の第10版であり(1384頁)、1766~68年の第12版でこれがさらに2299頁へと増補され、それがスミスによって購入されたというわけである。リンネの「動物学的用語法が実際に始まったのは『自然の体系』第10版(1758)においてのことで、後に(1765-1771)より十分なものへと仕上げられたが、それもごく限られた分類群においてのことであった」という点にも注意が必要である(Cain 1992, 248)。
- 19) とはいえ、ぜん虫類を昆虫類から初めて明確に分離したのはリンネであったという(Engel-Ledeboer 1964, 9)
- 20) 東京大学経済学部図書館の「アダムスミス文庫」に含まれるリンネの『自然の体系』は第12版であるが、初刷りではなく、刊行年は第1巻と第1巻第2部が1767年、第2巻と第3巻が1770年である。
- 21) 「外部感覚論」が構想されたのは1758年から1759年10月までのことだという考証についても、パークレーの・ヒューム的な名目論もその付随原理である観念連合も受け容れようとしなかったという主張も(Brown 1992, 335), 支持しがたい。その執筆、とくに後半部分の執筆が1758年以前ではありえないことの指摘はもちろん正しい。だが、後に考察するように、パークレーはともかくとして、ヒューム批判は「否定」というよりもむしろ「拡充」というべきものであるし、さらにこの論文執筆に当たってスミスが参照したのが、スミス文庫所蔵の『自然の体系』第12版ではなく、第10版であったという仮定が満たされる必要があるからである。
- 22) これはロスミスであり、蔵書は第13版ではなく第12版である。リンネの没後出版された13版の出版年は1788年であるが、東京大学経済学部所蔵のものは、1766-68年に出版された12版である。なお12版の出版年をより正確に記すと、Vol. 1が1766年、Vol. 1. ParsIIおよびVol. 2が1767年、Vol. 3が1768年である。
- 23) 篠原(1986)は、「外部感覚について」丹念な学史的考察を施しているにもかかわらず、この2点の認識が明確でなく、「決議論」に取って代わりうるような「認識論」、すなわち自然の構造にもとづく、外部世界とのコミュニケーション論を展開していたとか(篠原1986, 98)、「ケイムズやリードによる常識哲学の形成・展開過程と関連付けられるべきである」(篠原1986, 101)という理解や問題関心からの再構成であるため、問題そのものを明確に浮き彫りできなかったように思われる。コミュニケーションとは確かに一般的な概念であるが、文字通りのコミュニケーションが成立しうるのは、認識主体でありうる生物と生物の間のことであり、物質と生物の間にまで拡張することが可能かどうか、可能とすればそれはどのような意味のコミュニケーションなのか明確にされていないからである。
- 24) 「そのときまで真剣に目を向けたことがなかったいくつかの他の科学とともに、植物学の研究(しかし、これはそれほど進歩しませんでした)をして過ごしました」(Letter to A. Holt [1790], Smith 1977, 252)というスミス自身の回想に着目すれば、論文「外部感覚について」の執筆、とくにその後半部分の執筆は、1768年以降の時期、恐らく『諸国民の富』執筆の時期に重なりと推定するのが自然であろう。

- 25) ヴォルテールによって華々しく紹介され、デイドロが詳しく考察したチェスルデンの手術報告書をめぐってなされた現代に至るまでの議論と解釈の詳細については、鳥居（1990）を参照のこと。
- 26) 言語を単なる「音」の集合としてだけでなく、人間の間の「互いの欲求を理解」するための手段つまり間主観性とかかわりにおいて理解していたが故にこそ、「自然の言語」である視覚は、まったく例外がない文法（遠近法的な視覚がその一つである）を持つ、とスミスが主張できたという事実の持つ意味は重たい。現代と違って脳科学が未発展であったため、この文法がどこに存在するのかをスミスは正確に知らなかったわけだが、視覚を単なる受光装置と理解していたパークレーと異なっていることは確かである。パークレーとの異同を際立たせるため、『視覚新論』から一箇所引用しておこう。「視覚の固有な対象は自然の創造主の普遍的言語とも言うべきものを構成している。……我々が生きていくうえでのすべての営みやかかわりにおいて、主として導かれるのはまさにこうした視覚の対象の告知によるのである。そしてこの視覚の対象が離れたところにある対象を我々に表示し明らかにする仕方は、人間の取り決めによる言語や記号がそうする仕方と同じなのである。というのも、人間の取り決めによる言語や記号が、それによって表示される事物を示唆する仕方は、自然による何らかの類似や同一性によるのではなく、記号とそれによって表示される事物との間に我々が経験によって見出した習慣的結合によるのみだからである」（Berkeley [1709] 1975, 147）。したがって、「私がそれについて述べることは、たとえ彼から直接借用したものでないにしても、少なくともかれが既に言ったことによって示唆を受けたものである」（ES. 43）というスミスの指摘は、額面どおりに受け取るわけには行かない。
- 27) それゆえ、「広範な方法論的な著作の中で、彼は、観察に基づいて彼の理論を作り上げたとは決して主張しなかった」というフィッツギボンズのコメント（Fitzgibbons 1995, 91）については、まったく理解に苦しむと言うほかに無い。さらに、「スミスは工場制度の詳細な観察者としてしばしば指摘されてきたが、フランスの『百科全書』の中にピン工場における分業に関する記事があるだけで、スミスが実際にピン工場を訪問したかどうかは確かではない」（Ibid., 92）という指摘も、的外れである。科学的な観察とは、何も「自分の目で直接見ることだけ」を意味するわけではない。そもそも「観察」には、他人による観察の結果も含まれるはずである。「訪問した」ら観察に基づいており、「訪問していなかったら」観察に基づいていないなどという程度の認識論で、一体何を明らかにすることが出来るのだろうか。
- 28) 第6巻「ゼンチュウ」は *Systema Naturae* vol. 1 part 2 の 1069-1327 頁にわたって多数収録されているが、ゼンチュウ綱の感覚器官に関する一般的な特徴について、第12版では「感覚器官：触覚（頭はなく、かろうじて目は存在し、耳や鼻はない）」と記されている（vol. 1, 20）。
- 29) この後に、「このニュートンの学説に対し、フランクリンが異議を申し立てたが、不首尾に終わった」という説明が続くが、篠原（1986）が指摘したように、フランクリンの実験は1751年に実施されたとはいえ、公刊されたのは1769年のことであったから、少なくともこの部分の執筆は1769年以前ではありえないことになる。
- 30) リンネは大規模な植物園を大学内に持っていたし、動物標本もある程度もつてはいたが、『自然の体系』第10版から大増補されて収録された膨大な動物に関する情報は、大部分多くの他の自然史研究者の観察結果の利用であり、分類=体系化であった。第9版まで使用していた「四足動物」という綱の名称は、第10版で始めてリンネによって「哺乳類」と呼ばれるようになったし、人間がサルと同じ仲間の「類人猿」のトップに「ホモサピエンス」と位置づけられるようになったが、ホットェントットが山岳地帯に住むといわれる猿人同類の「怪物（モンスターロス）」に分類されていることから分かるように（Linne, 1766. vol. 1, 29）、収集した文献情報を利用してひたすら「分類した」ものであったことも否定できない。リンネの功績は、したがって現代では、分類の内容それ自体にあったのではなく、分類学的方法的基礎を提唱したこと、および「二名法」、つまり種を種が含まれる属名に種小名つまり種を区別する形容詞を添えてあらわす、という点であったと評されることが多い。リンネの業績の概略を紹介したものに松永（1992）がある。
- 31) この点についての詳細は Koerner（1999）とくに第5章と第6章を参照願いたい。
- 32) 参考のために、邦訳がある『自然の体系』第10版からリンネの自然認識を良く示している箇所を引用

しておこう。「丁度支配者のために Imperantium caussa 人民 Populi があるのではなく、守るべき秩序に従う者のために定められた支配者があるように、植物 Vegetabilia のために草食動物 Animalia Phytiphaga があり、草食動物のために肉食動物 A. Carnivora があり、肉食動物の大型のものは小型のもののためにあり、ヒト Homo は（自然の配分において動物であるかぎり）最大で単独のもの、すなわち特に自分自身のためにあり、賃金で雇われた残忍な動物たちは暴威をふるって、自然の共和国 Respublica naturae の光輝ある均衡が永続するようにしている。市民 cives の一人一人はかわるがわる支配的で理性的なヒト Homo rationalis imperans の権威に協力し、ヒトの至高善 Summum は共和国の創始者（神）を認識することである。自然の共和国 Res Publica Naturae は、丁度水が泉から小川、川、大河にいて海に至るように、最も数の多い平民 Plebs からより少ない貴族 Bobiles と最も少ない高官 Magnates を経て元首 Imperans へと登るが、これは数、力、能力においてたしかに無制限な最小の動物たちがより大きな、より鈍重な、よりすぐれた動物たちのために利用される限りそうなのであって、それというのも、自然は最小の動物たちにおいてもまったく同じように十全であるからである。住民と特有の活動は、1. 種を増やして Multiplicare Speciem（同一種の動物の数を増やすこと）、業務に足りるようにすること。2. 不潔なもの、死体、活気のないもの、汚れたもの、沈滞したもの、酸っぱいもの、腐ったものを選び去って、壮麗な宮殿 aula が輝くようにすること。3. 毎年植物を刈り取って、その一年間の劇場 theatrum が更新されるようにすること。4. 動物および植物の種間の均衡 Aequilibrium inter species を保って、比率が永続するようにすること。5. 自分自身を破滅から免れさせて、統治が空白にならぬようにすることである。」（Linnaeus [1758] 1956, 10-11: 訳 4-5）

33) 前者は「アダムスミス文庫」所蔵版（Nouvelle Edition. A Amsterdam, Chez F. H. Schneider. 1766）では第5巻53頁の記述に、後者はおなじ蔵書版の第15巻43頁の記述にもとづいており、『諸国民の富』執筆の過程で、かなり丹念に目を通してることがわかる。

34) スミスが「本能論にもとづく知識」を強調したというK. ブラウンの主張それ自体は正しい。だが既に見てきたように、「外部感覚」におけるスミスの議論は、生後に獲得する経験的知識だけでは動物の行動は説明できず、生得的な本能が存在するに違いないというものであり、決してブラウンが指摘するようなF. ハチソンや第3代シャフツベリー伯と同様に外的対象を捕らえる「外部感覚」とは独立した「内部感覚」の存在と両者の関係をめぐって論じられているわけではない（Brown 1992, 336）。スミスにとって「内部感覚」はあくまでも詳論に値しない「未知の原理」にすぎず、グラスゴー大学での師F. ハチソンなどのように人間だけがもつ「知覚 consciousness や省察 reflection」（Hutcheson [1747] 1990, 6）として理解されていたわけではない。この点の理解は、ブラウンが典拠の一つに利用したG. プライソンの認識も不十分なままに留まっている（Bryson [1945] 1968, 116-118）。

35) これは、ビュフォンの『自然史』第4巻（1753）に収録された100頁超の大論文「動物の本性に関する考察」の中心的な概念装置であり、人間と動物の共通性と差異を心理学的生物学とでも言うべき観点から比較考察したものである。ここで紹介した議論はBuffon（1954）323-29で展開されている。内部感覚についての議論の概略については、ロジェ（Roger 1989, 323-29: 訳 289-94）を参照のこと。

36) 先に注5)で、スミスの科学方法論をニュートンの的であり、デカルト的であると捉えた馬渡（1990）の理解——出発点ないし前提が既知ないし立証済みの原理であり、演繹的推論がなされ、観察されたものを説明するという「ニュートンの方法」は、ニュートン独自の発明ではなく、むしろデカルトの方法であった——を紹介しておいたが、以上の説明からわかるように、人間=人間性と社会=人間行動の全体を解明しようとしたスミス独自の方法は、馬渡が指摘するような一般的な「科学方法論」では把握しきれないであろう。要するにスミスは、デカルトの二元論に立つことなく、なお人間の「心」の生成とその働きを捉えようとしているのであるから。その限りで、スミスの方法は現代の進化生物学の方法に近いあるいは親和的である、と特徴付けてよいのである。

37) 「動物界の概観」冒頭で、動物の「運動、造作、外部感覚と内部感覚、および他を圧倒する姿態などを考察すれば、動物が神の創造物のうちで最高かつ最も完全な作品であることは明らかである」（Observationes in regnum animale: Engel-Ledeboer, 26）と指摘していたが、詳しい説明は与えられていない。た

- だし、「内部感覚と外部感覚」については、第10版以降明確に眼、耳、鼻、舌、触覚器からなる「感覚器官」として分類・叙述されることになる。第12版でも同様であるので、第10版の翻訳から関係の箇所を引用しておく。「感覚器官 *Organa sensuum* は物理的機械 *machinae physicae* であって、神経の末端すなわち最も近い脳の感覚の座に連絡し、それらの機械の神業によって *divina arte* 動物は物を知覚するのである (Linnaeus [1758] 1956, 9: 訳3)。
- 38) ただし、この定義はドウ・ヴァール (de Wall 1996 12: 訳21) から借用したもので、「社会生物学はあらゆる社会的な行動の生物学的基礎に関する体系的研究と定義できる」(Wilson 1975, 4: 訳5) という E. ウィルソン自身のものよりも、むしろ簡明で分かりやすい。
- 39) これは *The Penguin Dictionary of Biology* (2004) の説明である。
- 40) ウィルソンは「本能と習得行動との区別は有用であり」、両概念をめぐる過去の「意味論的な泥沼」から抜け出すことは可能だと主張し (Wilson 1975, 26-27: 訳49頁)、『知の挑戦——科学的知性と文化的知性の統合』(Wilson, 1999) では、言語本能をはじめ、遺伝子の中に生得的なものとして受け継がれるプログラムとしての「本能」概念を頻繁に用いている。
- 41) もとより当時のことであり、「過去の記録が間違っていなければ、人間の女性がアフリカのサルであるドリルと子をもうけた」(Locke [1693] 1995, III. 6. 23) などといういかがわしい生物学的観察に基づく主張も少なくないとはいえ、J. J. ルソーが非難したほど間違いだらけでもない。草食動物の場合、オスとメスの結合は交尾のときだけであるが、肉食動物の場合は子育てがはるかに困難で危険であるため、子供がひとり立ちするまで共同的な育児期間を含むように両性の結合期間つまり家族関係が長期化する。これは、家禽などの一部の鳥を除き、巢の中で給餌を余儀なくされる鳥類にも妥当するというロックの主張 (Locke [1690] 2002, II. 7. 79) に対し、ルソーは『人間不平等起源論』(1755) のなかで、「草食動物よりも猛獣の方がオスとメスの結合関係が長続きするとか、子供を養うためにオスがメスを助けるなどということ、ロック氏がどこで発見したか私は知らない」し、「ハゲワシやカラスの方がキジバトよりもその雌雄の結合が長続きすると誰が信じていられるか」(Rousseau [1755] 1964, 216: 訳174-75) と嘲笑しているが、両者の主張がともに野生動物の生態にかんする「科学的な観察」に基づいていないばかりか、そのような「観察の結果」を利用できるようになっていなかったことが指摘される必要がある。ルソーがリンネの雌雄を中心とした植物の分類体系にのめりこんだことはよく知られているが (松永 (1992, 103) によれば、1762年以降のことである)、『人間不平等起源論』執筆時にはまだリンネの『自然の体系』第10版 (1758) は未刊行で、ルソーの動物生態に関する記述は彼自身の観察とビュフォンの『自然史』に負うところが少なくないようである。18世紀における自然史研究の急速な発展を物語るころであるが、「鳥類」に限ったとしても、いかにスミスの「観察」が卓抜なものであったか良く分かる事例である。
- 42) ロックのいう「白紙」のメタファーについての分かりやすい解説については、Pinker (2002, 5: 訳(上) 26-27) を参照。
- 43) 進化生物学の立場に立つ霊長類行動学者ドウ・ヴァールの指摘を引用しておこう。「イヌ科の動物は社会規則の感覚が発達している。だからこそ彼らが作る狩の集団は秩序を保っているし、また人間が自分たちの都合のいいようにイヌを訓練できるのである。イヌ科の動物は規則を守るだけでなく、積極的に他者に規則を教え込むこともある。支配的立場にある者が懲罰を与えるために、わざと規則違反が起こるのを待ったり、ときには違反を誘発したりもする」(de Wall, 1996. 94: 訳161-62)。
- 44) これはまさにヒュームが言うところの「人間科学 *science of man*」の方法である。「人間科学が他の科学にとって唯一の堅固な基礎であるように、人間科学それ自身に与える唯一の堅固な基礎は経験と観察のうえに据えられなければならない」(Hume [1939-40] 2001. Introduction, 7) と述べた後、ヒュームはさらに次のように主張していた。「私にとって明らかだと思われることは、心の本質は身体の本質と同様に我々には未知のものであるから、その能力と性質について何らかの観念を形成するためには、注意深くかつ正確な具体的検証 *experiment*、つまり異なった環境や状況に起因する特別な結果に関する観察による以外は、同様にまた遂行しうるはずがないということだ。したがって、我々は具体的な検証を力の及ぶ

- かぎり追求し、もっとも単純で少数の原因からあらゆる結果を説明することによって、我々の原理に可能なかぎりの普遍性を与えようと努力するはずではあるが、なお確かなことは、我々は経験を超えて進むことはできないということである。したがって、人間本性について究極的で本源的な性質を発見したと申し立てるようないかなる仮説も、おこがましくも架空のものとしてあらかじめ拒否されなければならないのである」(Hume [1939-40] 2001. Introduction, 8)。ここではヒュームの言う experiment を「実験」ではなく「具体的検証」と広く解釈した(というのは、少なくとも彼は、後にビュフォンがいう意味での「実験」を重視しているわけではないからである)が、「経験と観察」に科学の最終的根拠を置くというヒュームの方法をスミスが継承していることは間違いない。
- 45) ここでは詳論は控えざるをえないが、ロックもヒュームも、たとえば Leahy (2004) 第4章および第5章から分かるように、心理学史では重要な位置と意義を付与されてきた。この関連でいえば、C. ダーウィンが「人間の由来」のなかでスミスの「同感」概念を高く評価し、『『道德感情の理論』冒頭の印象的な章』と絶賛した事実は (Darwin [1873] 1998)、まさに進化の過程における動物の社会的本能を重視した生物学者ダーウィンならではのことであったという事実が、注意されるべきだろう。ダーウィンによれば、「同感とは、社会的本能の基本的一要素」と言うのであるから (*Ibid.*, 116)、それも当然のことではある。もちろんダーウィンはヒュームの「共感」概念にも十分注意を払っており、「人間が、きわめて古い時代から仲間に対するある程度の本能的な愛情と同感を維持してきたと考えぬ理由はない」(*Ibid.*, 112) と述べ、ヒュームの『道德原理研究』(1751)を脚注に挙げていたことも、指摘しておく必要がある。「生物学者」でありながら「種の進化」のメカニズムの解明を志したダーウィンが、「社会的本能」という概念装置を編み出さざるを得なかったという事実は、進化論や進化思想の研究においてもう少し重視されるべきではなからうか。あいまいであるが故に、あるいは、心理学的な響きを持つが故に、それは次第に生物学者よってあまり使われなくなった概念なのである。
- 46) ちなみに、「心理学 psychology」という用語が使われ始めたのは18世紀末のことであるという (Bryson [1949] 1968, 114)。
- 47) スミスのいう「自然の営み(秩序)」は、たとえ政府による不自然な統治がなされても、それを乗り越えていくように作用する内生的な原理・原動力のことであって、「正義」とは直接関連づけられていない。そのことは、ヨーロッパでは都市にたまった資本(ストック)が溢れだす過程でかなりの富裕を達成したが、「それは本来のかつ必然的に遅く不確実なもので、無数の偶発事によって妨げられたり混乱させられ易く、したがって、何処から見ても自然の秩序および理性の秩序 the order of nature and of reason に反する」(Smith [1776] 1976, I. X. c. 26) という『諸国民の富』での主張と完全に平行している。自然の秩序ないし自然が命じることと、理性の秩序ないし理性が命じることが厳密にどのように異なるかは明示されていないが、ともかくもスミスが両者を区別しているという事実、および「自然の秩序 the order of nature」と言う表現(ここでは、「自然の命じること」と理解したほうがより適切であろう)は、『諸国民の富』をつうじてこの一箇所しか用いられていないという興味深い事実とに注意を喚起しておきたい。
- 48) 『道德感情の理論』第6版第6部3節では、「自負心 pride という本能は、精神薄弱者を国民同胞と同等なものとして支えていくために不可欠であるが、これをまったく欠いているのは精神薄弱者であって、国民同胞ではない」(Smith [1759] 1976, VI. iii. 49) という興味深い主張がなされる。そもそも『道德感情の理論』は人間行為の社会的妥当性——自己と他者の間に成り立つ関係の妥当性——をめぐる理論的な考察であるから、集団を形成し・束ねていく意識そのものの存在を前提しなければならぬ。自負心が「本能」であるという表現は、かなりあいまいなものではあるが、人間存在の集団性=社会性の認識に根ざしていることだけは、間違いない。
- 49) 「人間の幼児はきわめて長期にわたって全面的な依存状態にあり、長期間母親や乳母に抱かれて運ばなければならないため、そのような本能的な知覚は他のすべての動物種に較べてはるかに不必要であるように思われる。彼らにとってそれがいくらか役に立ちうるものになるまでには、観察と経験が、観念連合という周知の原理によって幼児の心のなかであらゆる可視の対象を、それに対応し、しかもそれをよく表

- 現している可蝕の対象と結びつけるにいたる十分な時間がある。自然は、どの動物にたいしても必要でも有益でもないような能力など決して授けないと言って良く、したがってその本能がそれにとっていくらか役立ちうようになる時よりはるか以前に、この本能が提供するように定められている知識を必ず獲得しなければならない動物にとって、この種の本能はまったく無益なものであつたであろう。だが子供は、きわめて早い時期から彼らに提示されるさまざまな可蝕的な物体の距離、形および大きさを知っているように見えるので、彼らでさえ、おそらく他の大部分の動物に較べればはるかに程度が劣っている可能性があるとはいえ、この種類の本能的な知覚というものを持っていると思つたくなるのだ」(ES, 74)というスミスの主張に着目する限り、本能を遺伝子に書き込まれた生得的な行動のプログラムと理解し、経験(育ち)が内容を埋め、豊富化していくと理解する現代の進化生物学の考え方と、内容的にまったく同じ理解であると言ってよいだろう。
- 50) このような主張をするスミスを「楽天主義者」と呼ぶべきか、それとも「悲観主義者」と呼ぶのかと問われれば、躊躇なく「両方である」と答えるだろう。進化論的思考とは本質的にそのような性質のものである。
- 51) 参考までに、現代の代表的な社会生物学・進化生物学者である E. O. ウィルソンによる進化と「本能」の関係に関する卓抜な説明を紹介しておこう(ただし、訳文には手を加えた)。「人間の脳には4億年の試行錯誤が刻印されている。それは、魚類から両生類へ、爬虫類、原始的な哺乳動物、さらに私たちの直接の先祖である霊長類へと、ほとんど途切れることなく連続的に、化石と分子的相同性によってたどることができる。その最終段階で、脳は根本的に新しいレベルに飛躍し、言語と文化にそなえた。しかし古い由来を持つため、からっぽの頭蓋骨に新しいコンピュータを埋め込むような具合にはいかなかった。そこには古い脳が本能の乗り物としてまとめられており、新しい部分が付け加えられたときも、すぐ隣で生きていた。新しい脳は、古い脳の内部や周辺にそれと歩調を合わせてとりあえず組み込まれざるをえなかった。そうでなければ、その組織は数世代も生き延びることはできなかつたに違いない。その結果が人間本性、つまり動物的な悪賢さと強い情動に駆り立てられて政治とアートの情熱を理性の働きと結びつけ、生き残るための新しい手段をつくりだすという、天賦の才能である」(Wilson 1999, 116; 訳 133)。
- 52) 言語能力に関するスミスの指摘は現代でもなお通用するが、後半の「他の動物のなかに、仲間の判断や行動を指導したり仕向けたりしようという欲求を見出しえない」という主張については、少し問題がある。社会性動物つまり「集団」で生活する動物については、長期にわたる粘り強い研究＝観察の膨大な積み重ねの結果、犬やチンパンジーなどについては集団内部で秩序形成と維持をめぐる「政治」が行なわれていることが分かってきている。たとえば、ドゥ・バールの著書 (de Wall [1982] 1998: 1996) を参照願いたい。
- 53) ただし、「交換しようとする性癖 trucking disposition」という表現も例外的に用いられている (WN I.ii. 3)。参考までに『法学講義 (LJA, March. 28. 1763)』では、「英知の産物ではない」が「人間による政策の結果ではない」と指摘した後で (Ibid., 347), すべてが the disposition to truck, barter, and exchange と表現されているが、1762年に書かれたとされる『「諸国民の富」初期草稿』における表現は、『諸国民の富』とまったく同様のものである。
- 54) 互恵的な好意のやり取りという意味での「交換」の前提条件としての「好意のやり取りの過程を記憶する心的能力」にしても、そこには一種の「理性」の存在が欠かせない。念のため、社会生物学者 E.O. ウィルソンの説明を確認しておこう。「互恵的利他主義が付きまとっている人間の行動は遺伝学的理論となら矛盾するものではないが、動物にはそういうことはほとんど無いように思われる。おそらくその理由は、動物では個体同士の関係が十分長続きしないとか、個体の行動に関する記憶が十分に確かなものではないために、人間に見られる互恵的利他主義に近い関係が進化するために必要な高度な個体的な付き合いが成立しないためであろう。私が知る限り唯一ともいえる例外は、これが最も期待できそうな動物——たとえば、アカゲザルとヒヒといったより頭の良いサルや類人猿——で発生している。群れのメンバーは徒党を組み、他の群れのメンバーと争うときに互いに助け合うことが知られている。チンパンジー、テナガザル、リカオン、さらにオオカミも、互いに餌をねだり合う」。(Wilson, [1975] 2000, 120: 訳 244)

- 55) 後半のヒュームの主張、つまり「この本能は、疑問の余地なく、過去の観察と経験から生じる」という主張は、10万年・100万年を単位に考える現代の生物進化論の立場に立てば「正しい」ことになるが（そうでなければ、類人猿をふくめた霊長類の中でなぜ人間だけが人間に進化したかを説明できなくなる）、ヒュームが生物学的見地からそのような長期の進化論的発想をもっていたと理解するのはかなり無理があり、むしろヒュームにおける「本能」概念の曖昧さ・不確定さを物語るところと理解すべきであろう。むしろここで指摘しておく価値があると思われるのは、ヒュームの慣習論と懐疑主義のうち、懐疑主義を批判し続けたT. リードの「本能論」が、同時代人スミスの理解と大きく異なっていて「神の御技であり、自己保存に役立つ無意識的行動の原因のすべて」と理解されていたという事実であろう。『人間精神の活動的力能に関する論考』（1788）収録の3論考の中に含まれる「本能について」という一章で展開されたリードの主張の特徴は、おおそ以下のとおりである。「行動の無意識的な推進力 *mechanical principles* は、本能と習慣という二つの種類にまとめることができよう」（Reid [1788] 1969, 100）。つまり、新生児がもつ搾乳や嚙下の能力、蜂の巣作りや鳥の営巣、更に人間の筋肉の動きなどといったそれぞれ動物種によって異なっているとはいえ、決して経験や理性や訓練の産物ではなく、造物主によってあらかじめ与えられた「生得的な」力能つまり本能をもつ。ここまではスミスとよく似ているが、リードの場合は、あくまでも偉大な造物主の御業であることに力点が置かれており、意識的ではない行為の原因となり、「自己保存」に役立つものはすべて「本能」と呼ばれる。嚙下時や手を伸ばすときの筋肉の実際の動き、眼の輝きを保つための瞬きなども、従ってすべて「本能」に含められることになる（Ibid., 107）。つまり、自己保存に役立つ盲目的で無意識的な行為を生み出す「一連の仕組み *machinery* は本能によって稼働させられる」（Ibid., 108）のである。だから、幼児期においては、人間と野蛮な動物はおなじ本能をもつとされる。意識的か無意識的かを区別の基準に据える点で心理学的な接近と言えるし、行為そのものを一連の生理学的な仕組みと捉えている点でスミスと異なるが、更に大きな違いは、「おそらく、人間の行動だけでなく、人間の判断したがってまた信念も、場合によっては、本能すなわち自然で盲目的な衝動によって導かれている」（Ibid., 100）というロックが批判しつくしたはずの「生得観念説」の復興と呼びうるような主張がなされたことであろう。リードが「従来学界では注目されなかった局面である18世紀における生得主義—経験主義 *nativism-empiricism* 論争」（Leahey 2004, 164）の一方の旗頭であったことは改めて強調する必要もないだろう。リードの哲学は、弟子デュガルド・ステュアートの手を経ていわゆる「常識哲学」として簡明な体系に仕上げられていくが、そもそもこのような創造主の御業に対する強い信念に基づいていたからこそ、それは18世紀末から19世紀のピューリタンの伝統が強かったアメリカの多くの大学学長たちを惹きつけたのである。それは、その後のアメリカにおける科学研究・高等教育の内容と方向性を左右する歴史的な特徴であるから、「スコットランド啓蒙」の多様性ととともに、あえて指摘しておく。
- 56) スミスは「進化論」を土台に考察を進めたわけではないから、このような特徴づけはあくまでもアナロジーであることに注意を喚起しておきたい。至近原因（作用因）と究極原因（目的因）との間の関連性についてスミスが『道徳感情の理論』のなかで指摘したことのうち、スミス独自の主張として今後さらに重視されるべき論点は以下の3点であろう。第一に、動植物に共通する「個体の維持と種の繁栄という自然の偉大な二つの目的」のなかには、「目的と手段」の見地から見て、「作用原因 *efficient cause* と究極原因 *final cause*」とが含まれているから、動植物の体液の循環や時計の歯車の動きという作用原因は「それ自体」としてだけでなく、「生命を維持する」とか「時刻を刻む」という究極目的とつねに関連付けて理解される必要がある。第二に、この二つの原因は「体軀の動きを説明するときには決して混同されない」のに、いざ「心 *mind* の働きを説明する段になると、二つの異なったことを取り違え、混同することが多い」。したがって第三に、「自然の推進力によって我々がこのような目的を促進するように仕向けている場合には、洗練され啓発された理性によって我々はそうするように勧められるとはいえ、その作用原因に関するかぎり、我々はこのような目的を推進する感情や行為をいとも簡単にそのような理性のせいだと考え、本当は神の英知であるものを人間の英知であると思い込んでしまう。表面的に考えるかぎり、作用原因はそれに帰せられた結果をもたらすに十分なものと映る。こうして人間本性という体系 *the system of human nature* は、そのさまざまな作用のすべてがこのような仕方の一つの原理から演繹されると、単純

- で好ましいものと見なされてしまうのだ」(TMS, II. ii. 3. 5)。要するにスミスは、人間本性を一つの単純な演繹の原理に基づいて体系化する試み（これは、経験と観察に並んで、ヒュームの方法のもう一つの柱である）に対して懐疑的なのであって、心の作用をもっぱら理性のそれに還元してしまうような形式的で皮相な人間本性＝人間的自然の理解では、人間行動の「作用原因」と「究極目的」とを混同し、取り違えてしまう可能性が強い、という鋭い警告を発していたと理解すべきなのである。
- 57) 『諸国民の富』第一編第11章「地代について」の立ち入った考察については、高（1991-95）を参照のこと。
- 58) ポジティブ・フィードバックということは、「均衡化の内的メカニズムを持ちながら、なお無限に拡大し続ける」ということであり、行き着く先、つまり最終目的は存在しないということの意味する。こうして科学の対象である自然の秩序の因果的解明にも「終わりが無い」ということになる。

参考文献

スミスの著作の簡略表記一覧

(本論文におけるスミスからの引用箇所はすべてパラグラフ番号で示す)

- LER. [1755-56] 1980, "A Letter to the Authors of the *Edinburgh Review*," in *Essays on Philosophical Subjects*. Oxford: Clarendon Press. 水田洋ほか訳『アダム・スミス哲学論文集』所収, 名古屋大学出版会, 1993年。
- TML. [1759] 1976. *The Theory of the Moral Sentiment*, Oxford: Clarendon Press. 水田洋訳『道徳感情論』岩波文庫, 2003年。
- FFL. [1767] 1983. "Considerations Concerning the First Formation of Languages," in *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*. Ed. by J.C. Bryce. Oxford: Clarendon Press. 水田洋訳『道徳感情論』所収, 岩波文庫, 2003年。
- WN. [1776] 1976. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Oxford: Clarendon Press. 大河内一男監訳『国富論』中公文庫, 1978年。
- HA. [1795] 1980. "The History of Astronomy," in *Essays on Philosophical Subjects*. 水田洋ほか訳『アダム・スミス哲学論文集』所収, 名古屋大学出版会, 1993年。
- ALM. [1795] 1980. "The History of the Ancient Logics and Metaphysics," in *Essays on Philosophical Subjects*. 水田洋ほか訳『アダム・スミス哲学論文集』所収, 名古屋大学出版会, 1993年。
- ES. [1795] 1980. "Of the External Senses," in *Essays on Philosophical Subjects*. 水田洋ほか訳『アダム・スミス哲学論文集』所収, 名古屋大学出版会, 1993年。
- LRBL. [1963] 1983. *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*. Edited by J.C. Bryce. Oxford: Clarendon Press. 宇山直亮訳『アダム・スミス文学・修辞学講義』未来社, 1972年。
- ED. 1978. "Early Draft of part of The Wealth of Nations", in *Lectures on Jurisprudence*, edited by R. L. Meek, D.D. Raphael and P.G. Stein. Oxford: Clarendon Press.
- LJ (A). 1978. Lectures on Jurisprudence: Report of 1962-3, in *Lectures on Jurisprudence*, edited by R. L. Meek, D. D. Raphael and P. G. Stein. Oxford: Clarendon Press.

その他

- Allen, David Elliston. [1976] 1994. *The Naturalist in Britain: A Social History*. Princeton: Princeton University Press. 阿部治訳『ナチュラリストの誕生: イギリス博物学の社会史』平凡社, 1990年。
- Becker, James F. 1961. "Adam Smith's Theory of Social Science," *Southern Economic Journal* 28(1): 13-21.
- Berkeley, George. [1709] 1975. *An Essay towards a New Theory of Vision*, in *Philosophical Works including the works on vision*. Introduction and Notes by M. R. Ayers. London: J. M. Dent & sons Ltd. 下條信輔・植村恒一郎・一ノ瀬正樹訳『視覚新論』勁草書房, 1990年。
- Brown, Kevin L. 1992. "Dating Adam Smith's Essay 'Of the external Senses'," *Journal of History of Ideas* 53

(2): 333-337.

- Bryson, Gladys. [1945] 1968. *Man and Society: The Scottish Inquiry of the Eighteenth Century*. New York: A. M. Kelley.
- Buffon, Georges-Louis Leclerc de. 1749-1767. *Histoire Naturelle, Générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roy*. A Paris, De L'imprimerie Royale.
- [1749-67] 1750-71. *Histoire naturelle générale et particulière. avec la description du cabinet du roy*. Tome 1-3 (1750). Á La Haye, chez Pierre de Hont. Tome 4-15 (1766-71). Amsterdam: Chez F. H. Schneider. (東京大学経済学部図書館 スミス文庫所蔵)
- [1791] 1812. *Natural History, General and Particular, by the Count de Buffon. History of Man and Quadrupeds*, translated, with notes and observations, by William Smellie. A New Edition with some account of the life of M. de Buffon, by William Wood. 20 vols. London: T. Cadell and W. Davies, Strand. ただし、1791年刊行の全9巻からなる旧版は現在 Thoemmes Press によるリプリント版が利用可能であるが、もともと第1巻から8巻までは1780年に、第9巻のみ1785年に発行されたい。アダム・スミス文庫に所蔵されていたのは、全8巻の1780年刊行のものであったようだ (Mizuta 2000, 37)。
- 1954. *Cœuvres philosophiques de Buffon*. Établi par Jean Piveteau. Paris: Press Universitaires de France.
- Cain, A. J. 1992. "The Methodus of Linnaeus," *Archives of natural History* 19(2): 231-50.
- Darwin, Charles. [1873] 1998. *The Descent of Man; and Selection in Relation to Sex*. 2nd ed. New York: Prometheus Books. 長谷川真理子訳『人間の進化と性淘汰Ⅰ, Ⅱ』文一総合出版, 1999年(ただし、本書は1871年の初版の翻訳である)。
- Engel-Ledeboer, M. S. J. and H. Engel. 1964. Carolus Linnaeus Systema Naturae 1735 Facsimile of the First Edition, with an Introduction and a first English Translation of the "Observations". Nieuwkoop: B. De Graaf.
- Evensky, Jerry. 2005. *Adam Smith's Moral Philosophy: A Historical and Contemporary Perspective on Markets, Law, Ethics, and Culture*. New York: Cambridge University Press.
- Ferber, Paul Lawrence. 2000. *Finding Order in Nature: The Naturalist Tradition from Linnaeus to E. O. Wilson*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press.
- Fitzgibbons, Athol. 1995. *Adam Smith's System of Liberty, Wealth, and Virtue: The Moral and Political foundations of The Wealth of Nations*. Oxford: Clarendon Press.
- Hutcheson, Francis. [1747] 1990. *A Short Introduction to Moral Philosophy*. Hildesheim: Georg Olms Verlag.
- Hume, David. [1739-40] 2001. *A Treatise of Human Nature*. Ed. by D.F. Norton and M. J. Norton. Oxford: Oxford University Press. 大槻春彦訳『人性論』岩波文庫, 1948-51年。
- [1748] 1999. *An Enquiry Concerning Human Understanding*. Ed. by Tom L. Beauchamp. Oxford: Oxford University Press. 齊藤繁雄・一ノ瀬正樹訳『人間知性研究』法政大学出版局, 2004年。
- [1751] 2004. *An Enquiry concerning the Principles of Morals*. Ed. by Tom L. Beauchamp. Oxford: Oxford University Press.
- Koerner, Lisbet. 1999. *Linnaeus: Nature and Nation*.: Harvard University Press: Cambridge, Massachusetts and London.
- Leahey, Thomas Hardy. 2004. *A History of Psychology: Main Currents in Psychological Thought*. The 6th edition. Upper Saddle River: Pearson Education, Inc..
- Lee, James. 1765. *An Introduction to Botany. Containing an Explanation of the Theory of that Science, and an Interpretation of its Technical Terms; Extracted from the Works of Dr. Linnaeus*. The Second Edition. London: J. and R. Tonson, in the Strand.
- Lindgren, J. Ralph. 1969. "Adam Smith's Theory of Inquiry," *Journal of Political Economy* 77: 897-915.
- 1973. *The Social Philosophy of Adam Smith*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Linnaeus, Carolus. [1935] 1964. *Systema Naturae*, in the facsimile edition with an Introduction and a First

- English Translation of the “Observationes,” by M. S. J. Engel-Ledebour and H. Engel. Nieuwkoop: B. De Graaf.
- [1758] 1956. *Systema Naturae*. A Photographic facsimile of the First Volume of the Tenth Edition. London: The Gresham Press. 山崎三郎訳『リンネ 自然の体系 第1巻・動物界 (改訂第10版) 鳥類編』山階鳥類研究所, 1982年。
- Linné, Caroli a. 1766–1768. *Systema Naturae*. Tomus 1–3. The 12th ed. Holmiae.
- Locke, John. [1693] 1995. *An Essay Concerning Human Understanding*. New York: Prometheus Books. 大概春彦訳『人間知性論』岩波文庫, 1972年。
- [1698] 2002. *Two Treatises of Government*. Cambridge: Cambridge University Press. 伊藤宏之訳『統治論』柏書房, 1997年。
- [1952] 2002. *Essays on the Law of Nature*, edited by W. von Leyden. Oxford: The Clarendon Press.
- Lyon, John and Sloan, Phillip R. 1981. *From Natural History to the History of Nature: Readings from Buffon and His Critics*. Notre Dame: University of Notre Dame Press.
- Lorenz, Konrad. [1949] 1986. *Er redete mit dem Vieh, den Vögeln und den Fischen*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag. 日高敏隆訳『ソロモンの指輪——動物行動学入門』早川書房, 1998年。
- Mandelbaum, Maurice. 1964. *Philosophy Science and Sense Perception: Historical and Critical Studies*. Baltimore: The Johns Hopkins Press.
- Mayr, Ernst. 1982. *The Growth of Biological Thought: Diversity, Evolution, and Inheritance*. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University.
- 1988. *Toward A New Philosophy of Biology: Observations of an Evolutionist*. Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press. 八杉貞雄・新妻昭夫訳『進化論と生物哲学——進化学者の思索』東京化学同人, 1994年。
- 1997. *This is Biology: The Science of the Living World*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. 八杉貞雄・松田学訳『これが生物学だ——マイアから21世紀の生物学者へ』シュプリング・フェアラーク東京, 1999年。
- Mayr, Otto. 1971. “Adam Smith and the Concept of the Feedback System,” *Technology and Culture*, 12(1): 1–22.
- Mizuta, Hiroshi. 2000. *Adam Smith’s Library: A Catalogue*. Oxford: Oxford University Press.
- Pinker, Steven. [1994] 2000. *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*. New York: HaperCollins Publishers Inc. 椋田直子訳『言語を生み出す本能 (上・下)』NHKブックス, 1995年。
- 2002. *The Blank Slate: The Modern Denial of Human Nature*. New York: Viking. 山下篤子訳『人間の本性を考える (上・中・下)』NHKブックス, 2004年。
- Raphael D.D. and A.S. Skinner. 1980. “General Introduction,” in *Adam Smith Essays on Philosophical Subjects*, 1–21. Edited by W.P.D. Wightman and J.C. Bryce. Oxford: Clarendon Press.
- Rausing, Lisbet. 2003. “Underwriting the Oeconomy: Linnaeus on nature and Mind.” In *Oeconomies in the Age of Newton*, ed. Margaret Schabas and Neil De Marchi. Durham, Duke University Press.
- Roger, Jacques. 1989. *Buffon, un philosophe au Jardin du Roi*. Paris: Librairie Arthème Fayard. ベカエール直美訳『大博物学者ビュフォン: 18世紀フランスの変貌する自然観と科学・文化誌』工作舎, 1992年。
- Rosenberg, Alexander. 1993. “Hume and the Philosophy of Science,” in *The Cambridge Companion to Hume*, 64–89. Edited by David F. Norton. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ross, Ian Simpson. 1995. *The Life of Adam Smith*. Clarendon Press: Oxford. 篠原久・只越親和・松原慶子訳『アダム・スミス伝』シュプリング・フェアラーク東京, 2000年。
- Rousseau, Jean-Jacques. [1755] 1964. *Discours sur l’origine et les fondements de l’inégalité*. Texte établi et annoté par Jean Starobinski. *Œuvres Complètes* III. Paris: Gallimard. 本田喜代治・平岡昇訳『人間不平等

- 起源論』岩波文庫, 1992年。
- Schabas, Margaret. 2003. "Smith's Debts to Nature," in *Oeconomies in the Age of Newton*, 262-81. Edited by Margaret Schabas and Neil de Marchi. Durham: Duke University Press.
- 2005. *The Natural Origins of Economics*. Chicago & London: The University of Chicago Press.
- Sloan, Phillip R. 1972. "John Locke, John Ray, and the Problem of the Natural System," *Journal of the History of Biology* 5(1): 1-53.
- 1976. "The Buffon-Linnaeus Controversy," *Isis* 67(3): 356-75.
- Smith, Adam. [1795] 1980, *Essays on Philosophical Subjects*. Edited by W. P. D. Wightman and J. C. Bryce. Oxford: Clarendon Press.
- 1977. *The Correspondence of Adam Smith*, edited by E. C. Mossner and I. S. Ross. Oxford: Clarendon Press.
- Stillingfreet, Benjamin. [1775] 1977. *Miscellaneous Tracts relating to Natural History, Husbandry, and Physick. To Which is Added the Calendar of Flora*. The Third Edition. New York: Arno Press Inc.
- Taka, Tetsuo. 2005. "Veblen's Theory of Evolution and the Instinct of Workmanship: An Ethological and Biological Reinterpretation," *The History of Economic Thought* 47(2): 32-44.
- Veblen, Thorstein B. [1898] 1919. "Why is Economics not an Evolutionary Science?" Reprinted in *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays*, 56-81. New York: B. W. Huebsh.
- de Wall, Frans. [1982] 1998. *Chimpanzee Politics: Power and Sex among Apes*. Revised Edition. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press. 西田利貞訳『政治をするサル：チンパンジーの権力と性』平凡社ライブラリー [1984] 1994年。
- 1996. *Good Natured: The Origins of Right and Wrong in Humans and Other Animals*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. 西田貞利・藤井留美訳『利己的なサル, 他人を思いやるサル：モラルはなぜ生まれたのか』草思社, 1998年。
- Wightman, W. P. D. 1980. "Introduction" of The External Senses, in Adam Smith Essays on Philosophical Subjects, 133-34. Edited by W. P. D. Wightman and J. C. Bryce. Oxford: Clarendon Press.
- Wilson, Edward O. [1975] 2000. *Sociobiology: The New Synthesis*. Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press. 伊藤嘉昭監修訳『社会生物学 合本版』新思泉社, 1999年。
- 1992. *The Diversity of Life*. Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press. 大貫昌子・牧野俊一訳『生命の多様性』(上・下) 岩波現代文庫, 2004年。
- 1999. *Consilience: The Unity of Knowledge*. New York: Vantage Books. 山下篤子訳『知の挑戦——科学的知性と文化的知性の統合』角川書房, 2002年。
- Wood, P.B. 1989. "The Natural History of Man in the Scottish Enlightenment," *History of Science* (27): 89-123.
- 1996. "The Science of Man," in *Cultures of Natural History*, 197-210. Edited by N. Fardine, F. A. Secord and E. C. Spary. Cambridge: Cambridge University Press.
- 荒俣 宏 (監修) (1991), ベカエール直美 (テキスト翻訳) 『ビュフォンの博物誌』工作舎。
- 篠原 久 (1986) 『アダム・スミスと常識哲学』有斐閣。
- 高 哲男 (1991~95) アダム・スミスの「地代」論 (I~V), 広島大学『経済論叢』14巻2号 113-44頁; 『同』15巻1号 135-64頁; 『同』16巻1・2号 197-245頁; 『同』17巻1号 137-90頁; 『経済学研究』(九州大学経済学会) 61巻2号 1-24頁。
- (1995) 『国富論』第1編第11章「地代について」のもつ意味をめぐって——『価値尺度』論との関係を中心に『経済学研究』61巻1号 17-31頁。
- (1996) 『国富論』第1編における2つの『構成価格』論——羽鳥教授のスミス『地代』論解釈に対する批判的評価を手がかりに『経済学研究』62巻1-6合併号 43-58頁。
- (2002) 自然的自由の経済思想：アダム・スミス 高 哲男編著『自由と秩序の経済思想史』52-73頁

名古屋大学出版会。

只腰親和 (1995) 『「天文学史」とアダム・スミスの道德哲学』 多賀出版。

田中正司 (1997) 『アダム・スミスの倫理学：『道德感情論』と『国富論』』 (上・下) 御茶の水書房。

鳥居修晃 (1990) 「先天盲における開眼手術後の視覚とパークリ」 G. パークリ著, 下條信輔・植村恒一郎・一ノ瀬正樹訳 『視覚新論』 勁草書房, 277-329 頁。

松永俊男 (1992) 『博物学の欲望：リンネと時代精神』 講談社現代新書。

馬渡尚憲 (1990) 『経済学の方法ロジー：スミスからフリードマンまで』 日本評論社。